

「学校と社会をつなぐ調査」 4時点目成果報告書

2019年11月

溝上慎一・学校法人河合塾(編集)

はじめに

「学校と社会をつなぐ調査」（通称：10年トランジション調査）は、2013年に京都大学高等教育研究開発推進センターと学校法人河合塾が共催で開始した、高校生を対象に10年間追跡調査するものです。全国378校の高校2年生45,311名が調査に参加し、この度の大学4年生の調査には、2,742名の大学生（2015年時の高校卒業時に現役で大学進学した生徒）が引き続き参加しました。10年トランジション調査は、調査の企画・分析者の溝上慎一が桐蔭学園へ異動したことで、2018年9月より溝上と河合塾との共同で継続して実施しています。

本報告書は、高校2年生の資質・能力が大学4年生にかけてどの程度変化するのか、その変化に学習やキャリア意識、就職活動の結果がどのように関連するのかを、分析結果から示すものです。結果を大きく4点にまとめます。

- 資質・能力は、高校2年時から大学4年時にかけて、クラス（高中低）内での変化は統計的に認められるものの、クラス間を移動する（たとえば中クラスから高クラス）変化は統計的には認められない。統計的な分析ではないものの、高校2年時と大学4年時を比べて、「大化け」した人（低クラスから高クラス）は0.3～1.4%（割合は資質・能力の次元によって異なる）、小から中へ、中から高クラスへと移動した人まで合わせても9.1～17.4%である。
- 資質・能力のクラス（高中低）と学習（主体的な学習態度やアクティブラーニング外化など）、キャリア意識（二つのライフ）は密接に関連している。資質・能力の高い人はアクティブラーニングをはじめとする学習に意欲的に取り組み、キャリア意識も高い。
- 資質・能力のクラスと就職活動の結果に差は認められない。二つのライフ（キャリア意識）の見通しあり・理解実行は見通しなしに比べて、第一志望の就職先に決まる確率が高い。
- 大学時代と就職活動のふり返り評価では、資質・能力のクラス、二つのライフともに統計的な差が認められた。資質・能力の低クラス、二つのライフ（見通しなし）の人は、就職活動で否定的にふり返ることが多い。

2017～2018年に出された新学習指導要領では、資質・能力の三つの柱（個別の知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）が強く打ち出されています。AI（人工知能）やIoTなどの技術革新をもとに産業や就業構造が大きく様変わりしています。世界的な研究開発や国際競争に伍するために、急速に進む人口減少や地方創生に対処するために、力強く課題に取り組み問題解決していく生徒学生の資質・能力の育成が謳われています。

しかしながら、高校2年時から大学4年時まで資質・能力が大きく変化しないという本調査結果は、実質的な義務教育段階となっている高校までの間に、ある程度児童・生徒の資質・能力を育てなければならないことを示唆します。とくに大学受験を理由に、テストに出ない問題解決や対人関係・コミュニケーション、協働等の資質・能力の育成を怠る高校や高校教員には、この知見をしっかりと伝える必要があります。大学受験を乗り越えて志望する大学へ入学しても、高校までの間に議論をしない、協働をしない、新しい経験に開かれていないなどの資質・能力が十分に身につけていない生徒は、大学生になってもそれらの資質・能力を十分に発展させられない、と理解しなければいけません。

厳しい現実ですが、資質・能力はいつでも好きなときに発展させられるものではなく、遅くとも高校生あたりまでに基礎的な部分が育成されるものと理解されなければいけません。人はゼロベースで発達するわけではなく、それまで積み上げてきた知識や能力、経験等を基礎として発達するものなのです。高校生終わりの18歳頃というのは、人の発達全体から見ると、成人（大人）に向けての完成期に当たります。それまでできなかったことは、これからも容易にできるようにはならないだろうという基本的な発達観をふまえて、新学習指導要領に基づく教育を実践していかなければいけません。

もちろん、クラス移動するほどに人は資質・能力を変化させないと言っても、そのことが人は「まったく成長しない」「変化しない」ということを意味するわけではありません。同じクラス（たとえば高クラス、中クラス）の中での資質・能力の得点の上昇は統計的にも認められます。また、資質・能力の発達に関わるさまざまな活動（学習や交友、クラブ・サークル、アルバイトなど）における質的な肯定的変化・拡がりまで加えて考えれば、学生は「成長する」と見ることはできます。「大化け」を期待するのは難しいですが、学生は「成長」することはできるのです。

最後に、資質・能力が、主体的な学習態度（学びに向かう力）やアクティブラーニング外化（思考力・判断力・表現力）と密接に関連していたという本調査の結果は、旧来の学力（個別の知識・技能、資質・能力の1つ目の柱）だけでは不十分であることを示唆します。資質・能力の三つの柱をバランス良く育てる学校教育が、生徒学生を新しい社会に向けて成長させるのだと言えます。

これほどの大規模調査で、高校生の姿と大学生の姿を縦断的に繋いだ調査研究は皆無に等しく、昨今の高大接続、学校から仕事・社会へのトランジション（移行）の改革のなかで貴重な資料になるはずで。もちろん、今回の結果だけで見方を定めてしまうのではなく、今後、他のサンプルや項目から継続的に調査研究をおこなって、本調査の結果を検証・修正し続けていくことが必要です。

本調査報告書が、学校関係者の基礎的資料となることを願っています。

2019年11月 溝上 慎一

報告書で示す主な結果

- 高2～大4までの資質・能力の変化は、潜在クラス成長分析によって、安定した姿（資質・能力の高クラス・中クラス・低クラス）として抽出された。統計的には、高校2年時から大学4年時にかけて、変化するクラスは見出されない。（分析1-1）
- 統計的な分析ではないが、高校2年時と大学4年時だけの得点を見て、どの程度「大化け」した学生がいるか、「クラス移動」に準ずる学生がいたかを分析した結果、「大化け」は全体の0.3～1.4%、大化けも含めた「クラス移動」は9.1～17.4%であることがわかった。（分析1-2）
- 資質・能力の高中低クラスは、属性（性や社会階層など）と一部統計的に有意な関連が見られるものの、効果量が低く、実質的な関連は認められない。（分析1-3）
- 大学1年時、3年時、4年時において、資質・能力の高クラスは低クラスよりもとりわけ下記の項目において高い得点を示していた。（分析1-4）
 - ✓主体的な学習態度
 - ✓アクティブラーニング外化
 - ✓二つのライフ（キャリア意識）
- 分析1-2と同様の潜在クラス成長分析の結果によれば、主体的な学習態度も大1～大4まで変化は起こりにくいようである（分析1-5）。アクティブラーニング外化も変化しない人が大半であるが（高中低のクラス維持：計76.5%）、それ以外に、低から高or中クラスへ変化する人が合わせて22.3%見られた。（分析1-6）
- 二つのライフ（キャリア意識）の大学1年時～大学4年時への変化も大きくない。専門分野別に見ても、どの分野でも多かれ少なかれ安定性を示している。（分析2）
- 資質・能力のクラスと就職活動の結果を分析した結果、資質・能力のクラスに関係なく、「内定をとり就職活動を終了した」人が大半（8割以上）であった（分析3-1）。第一志望の就職先であったかどうか、資質・能力のクラスとは関連が見られなかった（分析3-2）。しかし、大学1年時・4年時の二つのライフ（キャリア意識）と第一志望の就職先との関連は統計的に認められた（分析3-4）。資質・能力と就職活動との関連は認められないが、キャリア意識は第一志望の就職先と関連すると言える。
- 大学時代・就職活動のふり返り評価を肯定的（○）・否定的（×）で評定を求めたところ、資質・能力の高クラスは○○が統計的に多く見られ（78.4%）、低クラスでは××（22.7%）、×○（14.1%）、○×（23.9%）が多く見られることが明らかとなった。資質・能力の高クラスの方は○○で大学時代・就職活動を終える確率が高く、低クラスの方は大学時代か就職活動を×で終える確率の高いことが示唆される。（分析4-1）
- 二つのライフのステイタスにおいて、見通しあり・理解実行の方は大学時代・就職活動を肯定的にふり返り、見通しなしの方は、とくに就職活動を否定的にふり返る確率の高いことが示唆される。（分析4-2）
- 大学時代・就職活動の肯定的・否定的評価（○×）の理由で多く見られた3つは下記のとおりである。（分析4-3）
 - 大学時代○の理由
 - 友人関係に恵まれた（0.71）
 - さまざまな人や価値観にふれた（0.59）
 - 勉強を頑張った（0.57）
 - 大学時代×の理由
 - ただただ過ごしていた（0.60）
 - やりたいことや目的意識がなかった（0.52）
 - 勉強しなかった（0.46）
 - 就職活動○の理由
 - 第一志望に就職が決まった（0.52）
 - 自分のやりたいことをしっかり考えた（0.48）
 - いろいろな人と話をすることができた（0.45）
 - 就職活動×の理由
 - 自分が何をしたいのかよくわからなかった（0.49）
 - 就職活動をしっかりやらなかった（0.42）
 - 不満足の結果で終わった（0.35）

目次

目次

• はじめに	2
• 報告書で示す主な結果	4
• 調査概要	6
• これまでの調査と分析対象者について	7
• 分析1 高校2年時から大学4年時にかけて資質・能力等は変化するか	8
分析1-1 資質・能力の変化	
分析1-2 「大化け」する学生はどのくらいいるか	
分析1-3 属性との関連	
分析1-4 学習やキャリア意識等(大1・3・4)との関連	
分析1-5 主体的な学習態度の変化	
分析1-6 アクティブラーニング外化の変化	
• 分析2 大学1年時から大学4年時にかけての二つのライフの変化	20
分析2-1 全体のクロス集計	
分析2-2 専門分野別に見た二つのライフの変化	
属性別に見た二つのライフ(大学1年時・4年時)	
• 分析3 就職活動との関連	25
分析3-1 資質・能力と就職活動の結果との関連	
分析3-2 資質・能力と第一志望の就職先との関連	
分析3-3 二つのライフと就職活動の結果との関連	
分析3-4 二つのライフと第一志望の就職先との関連	
属性別に見た就職活動の結果	
属性別に見た第一志望の就職先	
• 分析4 大学時代・就職活動のふり返し評価	31
分析4-1 資質・能力との関連	
分析4-2 二つのライフとの関連	
分析4-3 肯定的評価・否定的評価の理由	
属性別に見た大学生活・就職活動の評価	
付録 使用変数の説明	37

調査概要

京都大学高等教育研究開発推進センターと学校法人河合塾は、2013年から高校2年生（全国約400校、4.5万人が参加）の学習や学校生活、キャリア形成等を通しての成長を、大学生・社会人へと約10年間追跡調査する「学校と社会をつなぐ調査」を推進しております。10年トランジション調査は、調査の企画・分析者の溝上慎一が桐蔭学園へ異動したことで、2018年9月より溝上と河合塾との共同で継続して実施しています。

1時点目（高校2年生）、2次点目（大学1年生）の詳しい報告は下記の2冊の本に、報告書や最新の案内はウェブサイトにもまとめられています。



溝上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）(2015). **どんな高校生が大学、社会で成長するのか**—「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ— 学事出版



溝上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）(2018). **高大接続の本質**—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題— 学事出版



ウェブサイト「学校と社会をつなぐ調査」
<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/>

この度、2013年時に高校2年生だった参加者が大学4年生になり（現役進学者のみ）、4時点目の調査（2018年11-12月）が実施されました。以下では、分析を通して、新学習指導要領で大きく提示された資質・能力が、高校2年生から大学4年生にかけてどの程度変化するのか、それらが学習やキャリア意識等にどのように関連するのか、就職活動の結果とどのように関連するのかを明らかにします。

これまでの調査と分析対象者について

● 高校2年時調査（高2）

2013年10～12月実施。全国計378校の高校2年生45,311名（男性21,238名、女性22,588名、不明1,485名）が教室で、あるいはインターネットで調査票に回答。メールアドレスをウェブ上で登録し、継続調査を承諾した16,829名（回答者の37.1%）が、以後の継続調査の対象者となる。

● 高校卒業時調査

2015年4月末にウェブ上で実施。7,420名（男性2,951名、女性4,469名。継続調査を承諾した人の44.1%）が回答。調査内容は、1時点目で尋ねられなかった項目（高校在籍時の居住都市、親の職業や学歴、年収等の社会階層情報）や卒業後の進路・就職状況など。

● 大学1年時調査（大1）

2015年11-12月にウェブ上で実施。5,939名（継続調査を承諾した人の35.3%）が回答。そのうち、4年制（あるいは6年制）大学へ進学した4,751名を本分析の対象とした。ただし、同一数字を続けて回答するなどいい加減だと見なされる回答者74名を除き、4,677名（男性1,792名、女性2,850名、回答拒否等その他35名）を分析対象者とした。

● 大学2年時調査（大2）

2016年11-12月にウェブ上で実施。分析対象者は、大1で4年制あるいは6年制の大学へ現役で進学しており、調査に回答した3,586名（男性1,335名、女性2,226名、回答拒否等その他25名）である。高2で継続調査を承諾した人の21.3%に相当する。なお、大学1年時調査で浪人していた人は1年ないしは2年遅れで追跡調査をしており、本調査の最終年度の分析で総合的に報告する予定である。

● 大学3年時調査（大3）：

2017年11-12月にウェブ上で実施。分析対象者は、大1で4年制あるいは6年制の大学へ現役で進学しており、調査に回答した3,239名（男性1,206名、女性2,014名、回答拒否等その他19名）である。高2で継続調査を承諾した人の19.2%に相当する。なお、大学1年時調査で浪人していた人は1年ないしは2年遅れで追跡調査をしており、本調査の最終年度の分析で総合的に報告する予定である。

● 大学4年時調査（大4）：

2018年11-12月にウェブ上で実施。分析対象者は、大1で4年制あるいは6年制の大学へ現役で進学しており、調査に回答した2,742名（男性996名、女性1,731名回答拒否等その他15名）である。高2で継続調査を承諾した人の16.3%に相当する。なお、大学1年時調査で浪人していた人は1年ないしは2年遅れで追跡調査をしており、本調査の最終年度の分析で総合的に報告する予定である。

大学4年時分析対象者の専門分野		度数(%)
1	人文科学系（文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など）	633 (23.1)
2	社会科学系（法学・経済学・商学・社会学など）	651 (23.7)
3	理科系（理学・工学・農学など）	789 (28.8)
4	芸術系（美術・音楽・デザイン学など）	61 (2.2)
5	1～4以外の文科系でもあり理科系でもある	92 (3.4)
6	4年制の医療系（薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など）	308 (11.2)
7	6年制の医療系（医学・歯学・薬学など）	165 (6.0)
8	その他	37 (1.3)
	未記入	6 (0.2)
	計	2,742 (100.0)

分析1 高校2年時から大学4年時にかけて資質・能力等は変化するか

高校2年時から大学4年時にかけて、資質・能力（他者理解力、計画実行力、コミュニケーション・リーダーシップ力、社会文化探究心）がどのように変化するかを、潜在クラス成長分析によって検討する。また、抽出された成長クラスと属性（性、社会階層など）との関連を分析して、高校2年時から大学4年時の資質・能力の変化に属性がどのように影響を及ぼしているかを明らかにする。

まとめ

- ・ 高校2年時から大学4年時にかけて資質・能力は、クラスを移動するほどには大きく変化しない（＝大化けしない）ことが明らかとなった。もっとも、クラス内での変化は統計的にも認めらるので、高校生から大学生にかけての成長は認められた。
- ・ 資質・能力の高中低クラスは、大1、大3、大4のいずれの時点においても、学習・キャリア意識と関連を示していた。
- ・ 属性別（性や社会階層など）に見た資質・能力の高中低クラスは、一部統計的に有意な関連が見られるが、効果量が低く、実質的な関連はあまり認められないと言える。

分析1-1 資質・能力の変化

手続き

高2～大4までの4つの資質・能力（他者理解力、計画実行力、コミュニケーション・リーダーシップ力、社会文化探究心）の得点を用いて、いくつかの成長クラスを抽出するべく潜在クラス成長分析（Latent Class Growth Analysis; LCGA; Nagin, 2005）をおこなった。分析にはM-Plus version 7.4を使用した。

結果と考察

クラス選定の基準には、（1）BIC（Bayesian Information Criterion）の値が小さいほど望ましい、（2）Entropyの値が.75以上が望ましい、（3）BLRT（the Bootstrapped Likelihood Ratio Test）（Nylund, Asparouhov, & Muthén, 2007）が有意であること、（4）最低でも1クラスに5%以上のサンプルが含まれること、（5）解釈可能性があることとされる（Ender, 2010；Reinecke, 2006）。p.9に示す結果とこれらの選定基準に基づいて、ここでは3クラスを抽出した。3クラス別に、4つの資質・能力の得点を高2～大4まで5時点プロットして図表化したものをp.10に示す。

図表に示されるとおり、3クラスはそれぞれ“高クラス”“中クラス”“低クラス”と命名されるような単純なグループでまとまった。この結果は、高2～大4にかけて、生徒学生の資質・能力が、クラス移動するほどの成長・変化をしないことを示唆している（たとえば低群から中群、高群へ、中群から高群、低群へ）。少なくとも本調査のデータからはそう言える。

しかしながら、この結果は人がまったく成長・変化しないことを意味するものではない。とくに高クラス、中クラスの傾きは有意で正の値を示しており（p.9の図表を参照。たとえばコミュニケーション・リーダーシップ力において、高クラスの傾き.07、中クラスの傾き.08が有意で正の値である）、クラス内での得点の変化（上昇）は統計的に認められるのである。逆に、低クラスの傾きは有意でないものが多く（他者理解力、計画実行力、コミュニケーション・リーダーシップ力の傾きは有意ではない）、唯一有意である社会文化探究心は傾きが-.04と負の値である。低クラスの社会文化探究心は、高2から大4にかけて成長が認められるどころか下降することを示唆している。

潜在クラス成長分析によるモデル適合度

Solution	BIC	BLRT	Entropy	Trajectory group prevalence (%)			
				1	2	3	4
Class 2	162293.02	$p < .001$	0.84	40.8	59.2		
Class 3	158426.17	$p < .001$	0.82	52.3	31.7	16.0	
Class 4	156804.08	$p < .001$	0.79	29.2	6.5	45.9	18.5

各クラスにおける4つの資質・能力の切片・傾き

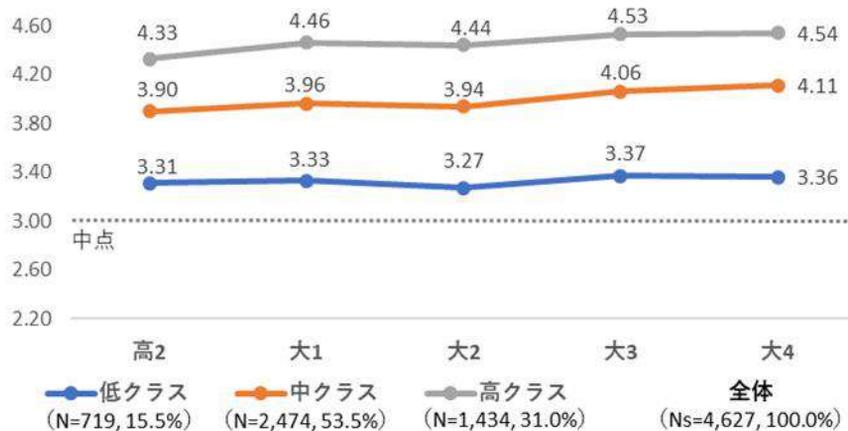
		高クラス	中クラス	低クラス
他者理解力	切片	4.35 ***	3.90 ***	3.33 ***
	傾き	.05 ***	.05 ***	.01
計画実行力	切片	3.84 ***	3.19 ***	2.62 ***
	傾き	.06 **	.06 **	-.01
コミュニケーション・リーダーシップ力	切片	4.06 ***	3.42 ***	2.77 ***
	傾き	.07 ***	.08 ***	.02
社会文化探究心	切片	4.12 ***	3.57 ***	3.07 ***
	傾き	.04	.04 ***	-.04 **

** $p < .01$ *** $p < .001$

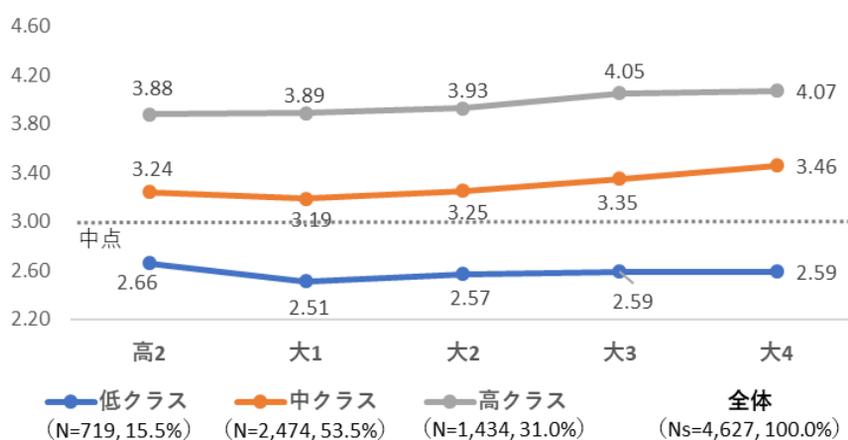
文献

- Enders, C. K. (2010). *Applied missing data analysis*. New York: Guilford.
- Nagin, D. S. (2005). *Group-based modeling of development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Nylund, K., Asparouhov, T., & Muthén, B. (2007). Deciding on the number of classes in latent class analysis and growth mixture modeling: A Monte Carlo simulation study. *Structural Equation Modeling*, 14, 535–569.
- Reinecke, J. (2006). Longitudinal analysis of adolescents' deviant and delinquent behavior: Applications of latent class growth curves and growth mixture models. *Methodology European Journal of Research Methods for the Behavioral and Social Sciences*, 2, 100–112. doi: 10.1027/1614-2241.2.3.100

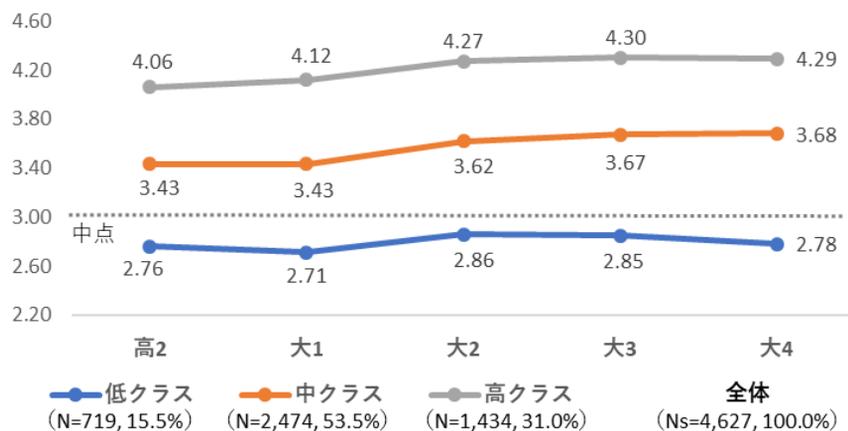
<他者理解力>



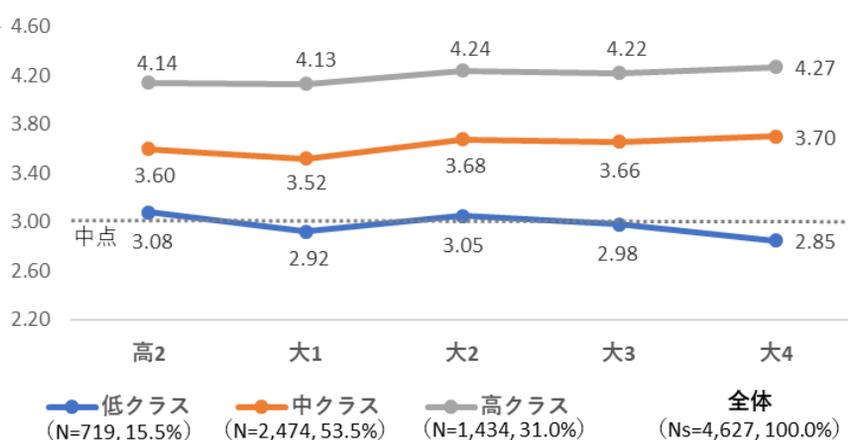
<計画実行力>



<コミュニケーション・リーダーシップ力>



<社会文化探究心>



分析1-2 「大化け」する学生はどのくらいいるか

手続き

分析1-1で、統計的にはクラス移動は認められないことが明らかになったが、あえて「大化け」あるいは「クラス移動」に準ずる学生が、高2から大4への2時点変化でどの程度いるのかを分析してみた。以下の操作的手続きで合致する学生を抽出した。

- ・大化け・・・高2で低クラスに属しており、大4の得点が高クラスの平均点以上に変化する人。
- ・クラス移動・・・「大化け」に加えて、高2で低（あるいは中）クラスに属しており、大4の得点が高（あるいは大）クラスの平均点以上に変化する人。

結果と考察

結果を見ると、「大化け」率は全体の0.3～1.4%ときわめて少ないことがわかる。「大化け」も含めた「クラス移動」率は、全体の9.1～17.4%である。

本データがある程度のサンプル数を確保しているとは言え、母集団を代表していない可能性は排除できないので、それを考慮して「大化け」は多くて10%前後、「クラス移動」は20-30%くらいだろうと理解してみる。これだけ甘く見積もっても、残りの70-80%の学生の資質・能力が（「クラス移動」という意味で）変化しない事実は受け止めなければならない。

<他者理解力>

大学4年時

	高クラス(4.54以上)	中クラス以上(4.11以上)	低クラス
高校2年時 低クラス	37(1.4)	71(2.6)	—
中クラス	379(13.4)	—	—
高クラス	—	—	—

- ・大化け率(1.4%)
- ・クラス移動率(17.4%)

<計画実行力>

大学4年時

	高クラス(4.07以上)	中クラス以上(3.46以上)	低クラス
高校2年時 低クラス	19(0.7)	81(3.0)	—
中クラス	206(7.5)	—	—
高クラス	—	—	—

- ・大化け率(0.7%)
- ・クラス移動率(11.2%)

<コミュニケーション・リーダーシップ力>

大学4年時

	高クラス(4.29以上)	中クラス以上(3.68以上)	低クラス
高校2年時 低クラス	9(0.3)	57(2.1)	—
中クラス	184(6.7)	—	—
高クラス	—	—	—

- ・大化け率(0.3%)
- ・クラス移動率(9.1%)

<社会文化探究心>

大学4年時

	高クラス(4.27以上)	中クラス以上(3.70以上)	低クラス
高校2年時 低クラス	20(0.7)	54(2.0)	—
中クラス	336(12.3)	—	—
高クラス	—	—	—

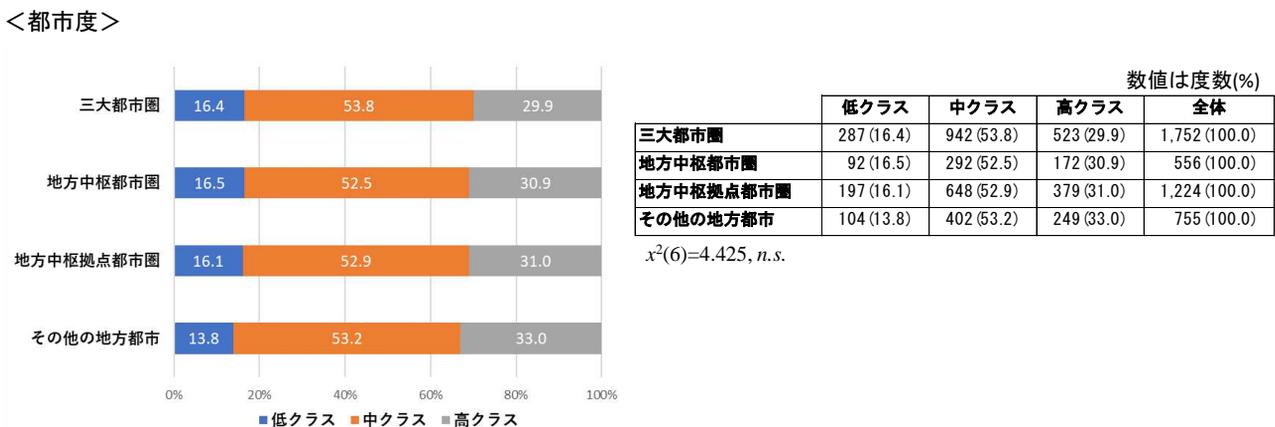
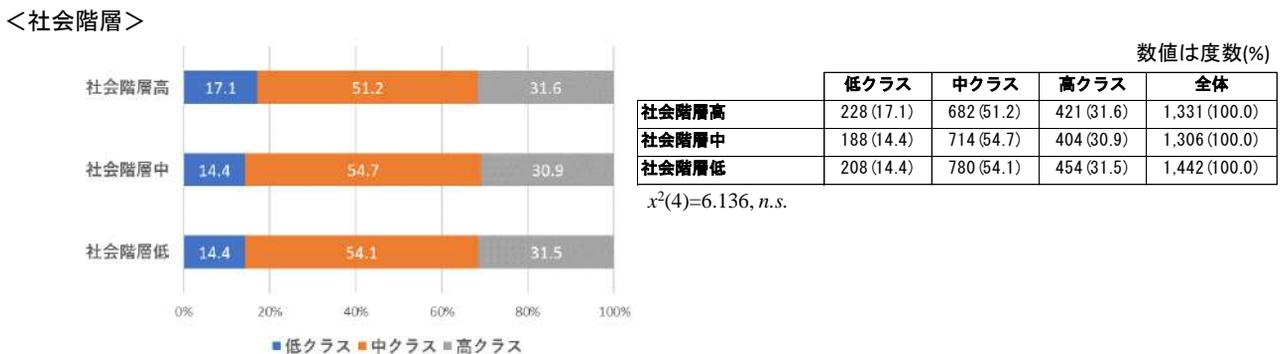
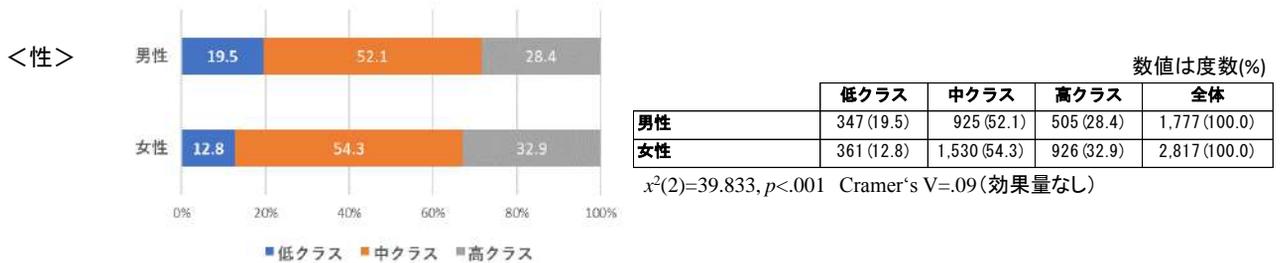
- ・大化け率(0.7%)
- ・クラス移動率(15.0%)

手続き

資質・能力の高中低クラスと属性（性、社会階層、都市度、中高一貫、SSH参加・満足、高校の進学程度、地域移動、大学入試の形態、第一志望、大学の所属学部・学科、大学偏差値）との関連について分析をおこなった。なお、属性項目の質問や得点化については、「付録：使用変数の説明」（p.36～）を参照のこと。

結果と考察

資質・能力の高中低クラスは、属性（性や社会階層など）と一部統計的に有意な関連が見られるが、効果量が低く、実質的な関連はあまり認められないと言える。



< 中高一貫 >

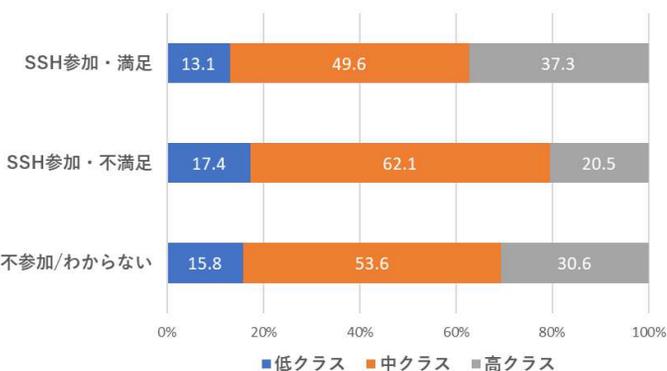


数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
中高一貫校	124 (14.5)	438 (51.0)	296 (34.5)	858 (100.0)
それ以外	594 (15.8)	2,032 (54.1)	1,132 (30.1)	3,758 (100.0)

$\chi^2(2)=6.341$ $p<.05$ Cramer's V=.04 (効果量なし)

< SSH参加・満足 >

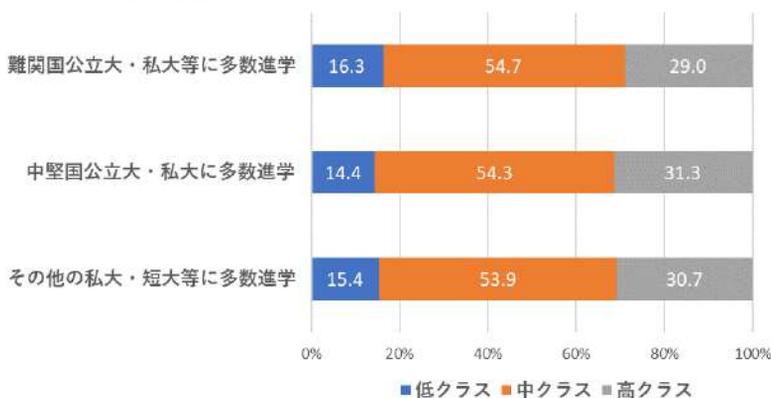


数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
SSH参加・満足	70 (13.1)	265 (49.6)	199 (37.3)	534 (100.0)
SSH参加・不満足	34 (17.4)	121 (62.1)	40 (20.5)	195 (100.0)
SSH不参加/わからない	615 (15.8)	2,082 (53.6)	1,190 (30.6)	3,887 (100.0)

$\chi^2(4)=20.723$, $p<.01$ Cramer's V=.05 (効果量なし)

< 高校の進学程度 >

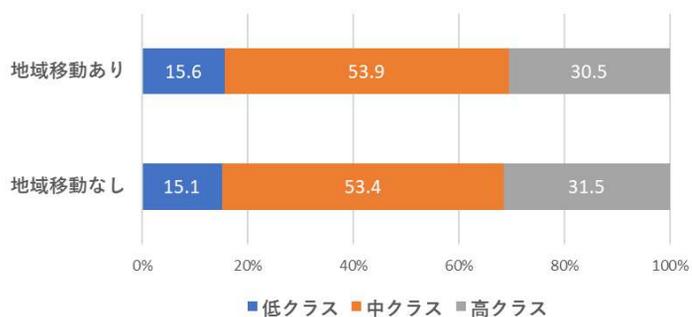


数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
難関国公立大・私大等に多数進学	265 (16.3)	891 (54.7)	473 (29.0)	1,629 (100.0)
中堅国公立大・私大に多数進学	170 (14.4)	639 (54.3)	368 (31.3)	1,177 (100.0)
その他の私大・短大等に多数進学	157 (15.4)	549 (53.9)	313 (30.7)	1,019 (100.0)

$\chi^2(4)=2.816$, $n.s.$

<地域移動>

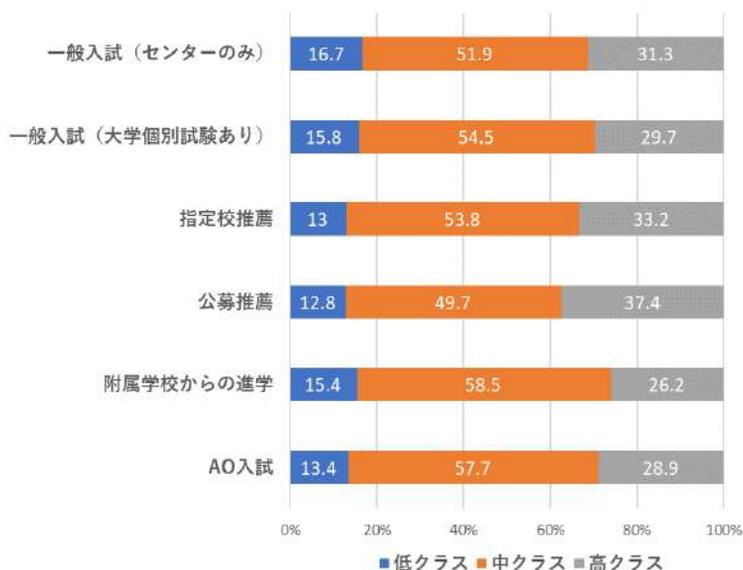


数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
地域移動あり	350 (15.6)	1,208 (53.9)	684 (30.5)	2,242 (100.0)
地域移動なし	309 (15.1)	1,090 (53.4)	642 (31.5)	2,041 (100.0)

$\chi^2(4)=0.509, n.s.$

<大学入試の形態>

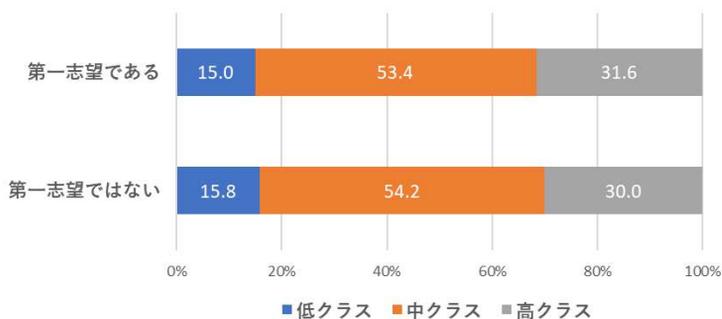


数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
一般入試(センターのみ)	87 (16.7)	270 (51.9)	163 (31.3)	520 (100.0)
一般入試(大学個別試験あり)	457 (15.8)	1,580 (54.5)	862 (29.7)	2,899 (100.0)
指定校推薦	33 (13.0)	136 (53.8)	84 (33.2)	253 (100.0)
公募推薦	48 (12.8)	186 (49.7)	140 (37.4)	374 (100.0)
附属学校からの進学	10 (15.4)	38 (58.5)	17 (26.2)	65 (100.0)
AO入試	13 (13.4)	56 (57.7)	28 (28.9)	97 (100.0)

$\chi^2(10)=13.421, n.s.$

<第一志望>

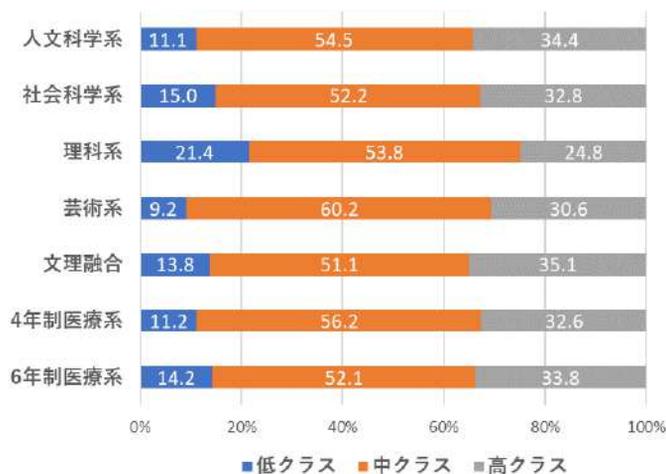


数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
第一志望である	317 (15.0)	1,130 (53.4)	669 (31.6)	2,116 (100.0)
第一志望ではない	333 (15.8)	1,145 (54.2)	634 (30.0)	2,112 (100.0)

$\chi^2(2)=1.429, n.s.$

<大学の所属学部・学科>

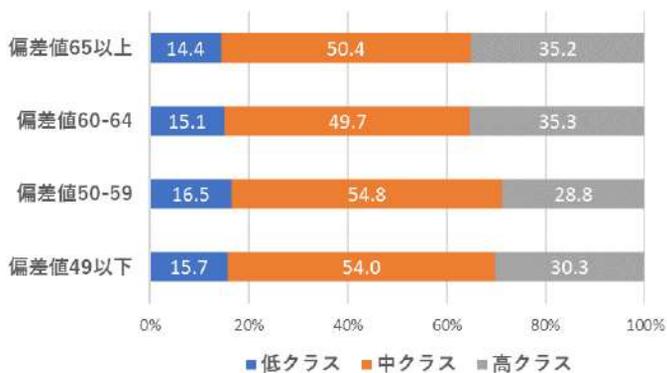


数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
人文科学系	111 (11.1)	547 (54.5)	345 (34.4)	1,003 (100.0)
社会科学系	143 (15.0)	497 (52.2)	313 (32.8)	953 (100.0)
理科系	273 (21.4)	686 (53.8)	317 (24.8)	1,276 (100.0)
芸術系	9 (9.2)	59 (60.2)	30 (30.6)	98 (100.0)
文理融合	26 (13.8)	96 (51.1)	66 (35.1)	188 (100.0)
4年制医療系	49 (11.2)	245 (56.2)	142 (32.6)	436 (100.0)
6年制医療系	34 (14.2)	125 (52.1)	81 (33.8)	240 (100.0)

$\chi^2(12)=74.675, p<.001$ Cramer's V=.10 (効果量なし)

<大学偏差値>



数値は度数(%)

	低クラス	中クラス	高クラス	全体
偏差値65以上	80 (14.4)	281 (50.4)	196 (35.2)	557 (100.0)
偏差値60-64	73 (15.1)	241 (49.7)	171 (35.3)	485 (100.0)
偏差値50-59	300 (16.5)	998 (54.8)	524 (28.8)	1,822 (100.0)
偏差値49以下	156 (15.7)	536 (54.0)	301 (30.3)	993 (100.0)

$\chi^2(6)=13.387, p<.05$ Cramer's V=.04 (効果量なし)

手続き

分析1-3と同様に、資質・能力の高中低クラスの間で、大1・3・4の学習（主体的な学習態度、アクティブラーニング外化、成績、授業外学習時間）やキャリア意識（二つのライフ）に差が見られるかを分析した。

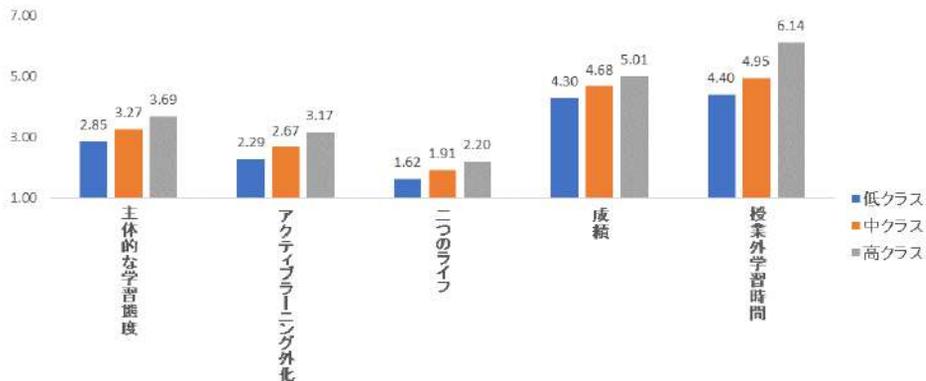
なお、授業外学習時間には、「（大学生の）一週間の生活」の質問の中の“授業に関する勉強（予習や復習、宿題・課題など）をする”時間数を用いた。ほか、各項目の得点化については、「付録：使用変数の説明」（p.36～）を参照のこと。

結果と考察

分析の結果、大1・3・4ともに、すべての学習、キャリア意識の得点で有意差が見られた。中でも、「主体的な学習態度」「アクティブラーニング外化」「二つのライフ」については、中程度以上の効果量が見られた。

高2からの資質・能力が、大1はもとより大3、大4においても、学習やキャリア意識に大きな影響を及ぼすことを示唆している。

<大学1年時>

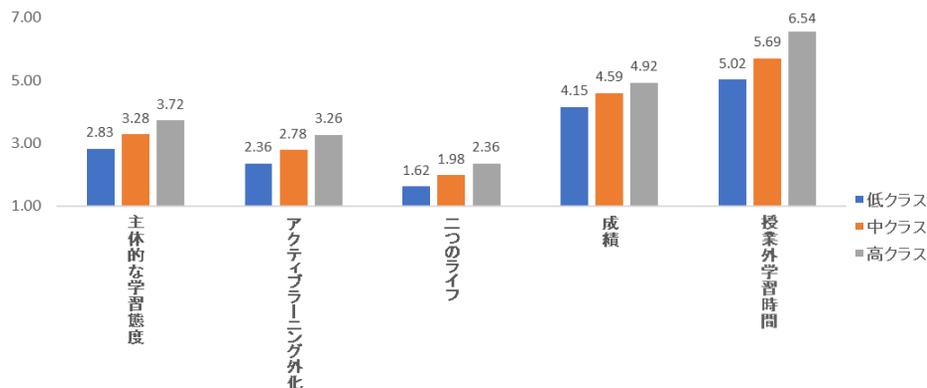


資質・能力のクラス（高2～大4）

数値は平均(SD)

	得点レンジ	資質・能力のクラス（高2～大4）				一要因分散分析	効果量(η^2)	
		全体 N=3,577-4,627	低クラス N=559-719	中クラス N=1,899-2,474	高クラス N=1,119-1,434			
大学	主体的な学習態度	1-5	3.34 (0.72)	2.85 (0.67)	3.27 (0.66)	3.69 (0.65)	$F(2,4624)=411.165, p<.001$.15(大)
	アクティブラーニング外化	1-4	2.77 (0.76)	2.29 (0.77)	2.67 (0.71)	3.17 (0.66)	$F(2,4624)=417.690, p<.001$.15(大)
1	二つのライフ	1-3	1.96 (0.70)	1.62 (0.63)	1.91 (0.69)	2.20 (0.68)	$F(2,3574)=144.387, p<.001$.08(中)
年	成績	2-6	4.72 (1.13)	4.30 (1.25)	4.68 (1.12)	5.01 (0.99)	$F(2,4440)=100.018, p<.001$.04(小)
時	授業外学習時間	0-70	5.23 (4.74)	4.40 (3.81)	4.95 (4.09)	6.14 (5.92)	$F(2,4624)=42.287, p<.001$.02(小)

<大学3年時>

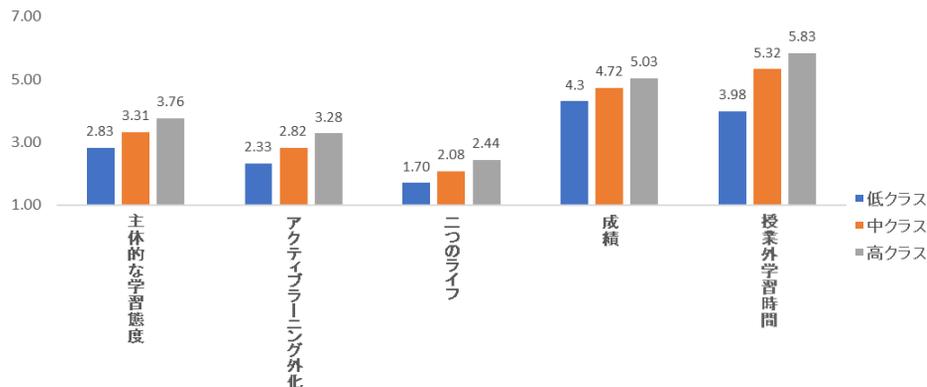


資質・能力のクラス (高2~大4)

数値は平均(SD)

	得点レンジ	全体	低クラス	中クラス	高クラス	一要因分散分析	効果量(η^2)	
		N=3,084-3,194	N=455-487	N=1,620-1,683	N=1,009-1,024			
大学3年時	主体的な学習態度	1-5	3.35 (0.75)	2.83 (0.76)	3.28 (0.68)	3.72 (0.67)	$F(2,3179)=292.933, p<.001$.16(大)
	アクティブラーニング外化	1-4	2.87 (0.69)	2.36 (0.74)	2.78 (0.61)	3.26 (0.56)	$F(2,3170)=389.249, p<.001$.20(大)
	ニつのライフ	1-3	2.05 (0.77)	1.62 (0.71)	1.98 (0.76)	2.36 (0.68)	$F(2,3169)=182.594, p<.001$.10(中)
	成績	2-6	4.63 (1.16)	4.15 (1.33)	4.59 (1.12)	4.92 (1.04)	$F(2,3081)=74.983, p<.001$.05(小)
	授業外学習時間	0-74	5.86 (6.71)	5.02 (5.94)	5.69 (6.48)	6.54 (7.32)	$F(2,3191)=9.710, p<.001$.01(無)

<大学4年時>



資質・能力のクラス (高2~大4)

数値は平均(SD)

	得点レンジ	全体	低クラス	中クラス	高クラス	一要因分散分析	効果量(η^2)	
		N=2,653-2,740	N=374-411	N=1,408-1,444	N=871-885			
大学4年時	主体的な学習態度	1-5	3.39 (0.76)	2.83 (0.78)	3.31 (0.69)	3.76 (0.69)	$F(2,2715)=251.931, p<.001$.16(大)
	アクティブラーニング外化	1-4	2.90 (0.68)	2.33 (0.69)	2.82 (0.61)	3.28 (0.57)	$F(2,2713)=354.234, p<.001$.21(大)
	ニつのライフ	1-3	2.14 (0.77)	1.70 (0.77)	2.08 (0.76)	2.44 (0.65)	$F(2,2707)=144.787, p<.001$.10(中)
	成績	2-6	4.76 (1.08)	4.30 (1.26)	4.72 (1.04)	5.03 (0.96)	$F(2,2650)=63.801, p<.001$.05(小)
	授業外学習時間	0-70	5.28 (7.65)	3.98 (7.03)	5.32 (7.72)	5.83 (7.75)	$F(2,2737)=8.248, p<.001$.01(無)

分析1-5 主体的な学習態度の変化

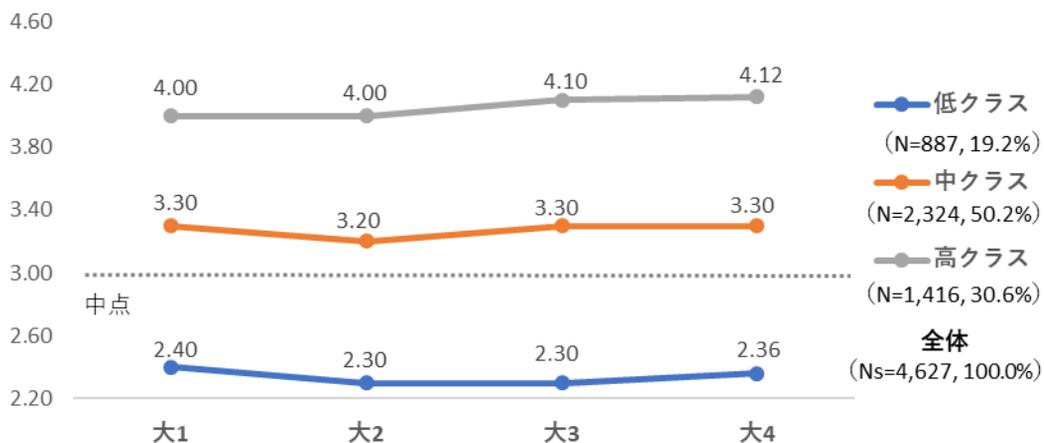
手続き

分析1-1と同様に、大1～大4までの4つの主体的な学習態度の得点を用いて、潜在クラス成長分析をおこなった。

結果と考察

図表に示されるとおり、資質・能力と同様の“高クラス”“中クラス”“低クラス”と命名される単純なグループが抽出された。この結果は、大1～大4にかけて、学生の主体的な学習態度が、クラス移動（たとえば低群から中群、高群へ、中群から高群、低群へ）するほどの成長・変化をしないことを示唆している。

もっとも、資質・能力のクラスの結果と同様に、この結果が人はまったく成長・変化しないことを意味するものではない。中クラス、高クラスの傾きは有意で正の値を示しており（それぞれ.01, .04）、とくに高クラスの学生の得点の上昇は大きい。逆に、低クラスの傾きは有意に負の値を示しており（-.05）、大1から大4にかけて主体的な学習態度は落ちると示唆される。



潜在クラス成長分析によるモデル適合度

Solution	BIC	BLRT	Entropy	Trajectory group prevalence (%)			
				1	2	3	4
Class 2	26975.76	$p < .001$	0.71	41.9	58.1		
Class 3	25364.29	$p < .001$	0.71	50.2	30.6	19.2	
Class 4	24668.08	$p < .001$	0.71	30.2	18.4	7.0	44.3

各クラスにおける主体的な学習態度の切片・傾き

	低クラス	中クラス	高クラス
切片	2.46 ***	3.23 ***	3.97 ***
傾き	-.05 ***	.01 *	.04 ***

分析1-6 アクティブラーニング外化の変化

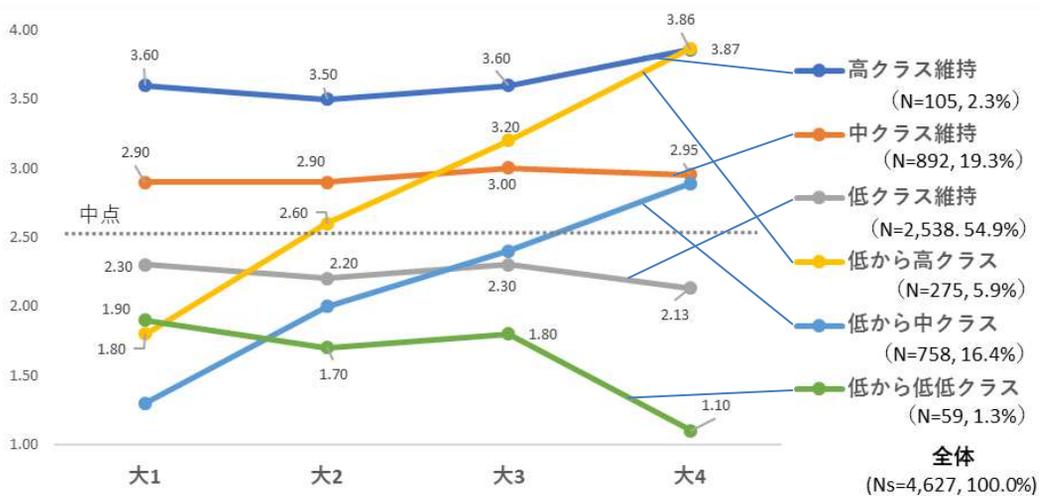
手続き

分析1-1と同様に、大1～大4までの4つのアクティブラーニング外化の得点を用いて、潜在クラス成長分析をおこなった。

結果と考察

資質・能力、主体的な学習態度の分析結果と違い、“高クラス” “中クラス” “低クラス” 以外に“低から高クラス” “低から中クラス” “低から低低クラス” と命名されるグループも抽出された。アクティブラーニング外化は、大1～大4にかけてのクラス移動が統計的にも認められ、しかも、「大化け」（低から高クラスがこれに相当。分析1-2を参照）が5.9%もいることが明らかとなった。もっとも、低から高クラス、低から中クラスを合わせても22.3%であり、大多数の学生はクラス移動をしないという見方は、資質・能力、主体的な学習態度の結果と同様である。

高クラスの切片が正の値で有意であり（.16）、高クラスの中での大1～大4にかけての成長・変化はかなり大きいことも結果の一つである。



潜在クラス成長分析によるモデル適合度

Solution	BIC	BLRT	Entropy	Trajectory group prevalence (%)						
				1	2	3	4	5	6	7
Class 5	27829.61	$p < .001$	0.64	3.2	18.9	54.9	5.6	17.5		
Class 6	27682.88	$p < .001$	0.71	2.3	19.3	54.9	5.9	16.4	12.8	
Class 7	27525.80	$p < .001$	0.70	16.3	53.4	1.4	2.8	2.3	16.3	7.6

各クラスにおけるアクティブラーニング外化の切片・傾き

	高クラス維持	中クラス維持	低クラス維持	低から高クラス	低から中クラス	低から低低クラス
切片	3.35 ***	2.93 ***	2.36 ***	1.90 ***	1.58 ***	2.07 ***
傾き	.16 ***	.01	-.01 ***	.70 ***	.43 ***	-.31 ***

分析2 大学1年時から大学4年時にかけての二つのライフの変化

二つのライフ（キャリア意識）は、学習意欲や資質・能力と高い関連性を示す、大学生の学びと成長を促す「自律のエンジン」の一要素である（溝上責任編集, 2018）。同書では、京都大学・電通育英会主催の『大学生のキャリア意識調査』のデータを用いて、二つのライフ（キャリア意識）が大学4年間で変わりにくい結果を紹介しているが、データ数が少ないため、大規模なデータでの検証が必要であることが課題として述べられている。ここでは、この観点からの検証をおこなう。

Reference: 溝上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）（2018）. 高大接続の本質－「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題－ 学事出版

まとめ

- 全体的に、二つのライフは大学1年時から4年時にかけて、比較的に変わりにくいことが明らかとなった。中でも、大学1年時で見通しあり・理解実行、見通しなしの学生は、約半数がそのままのステータスで移行することが明らかとなった。
- 専門分野別に見ると、細かな特徴はあるものの、おおむね同様の傾向が認められた。
- 属性別（性や社会階層など）に二つのライフ（大学1年時・4年時）の頻度を分析した結果、大学の所属学部・学科のみ統計的な有意差が見られた。1年時は、見通しあり・理解実行は医療系（4年制・6年制）で多く、見通しなしは社会科学系、理科系が多い。4年時は、見通しあり・理解実行は医療系（4年制）で多く、見通しなしは理解系が多い。

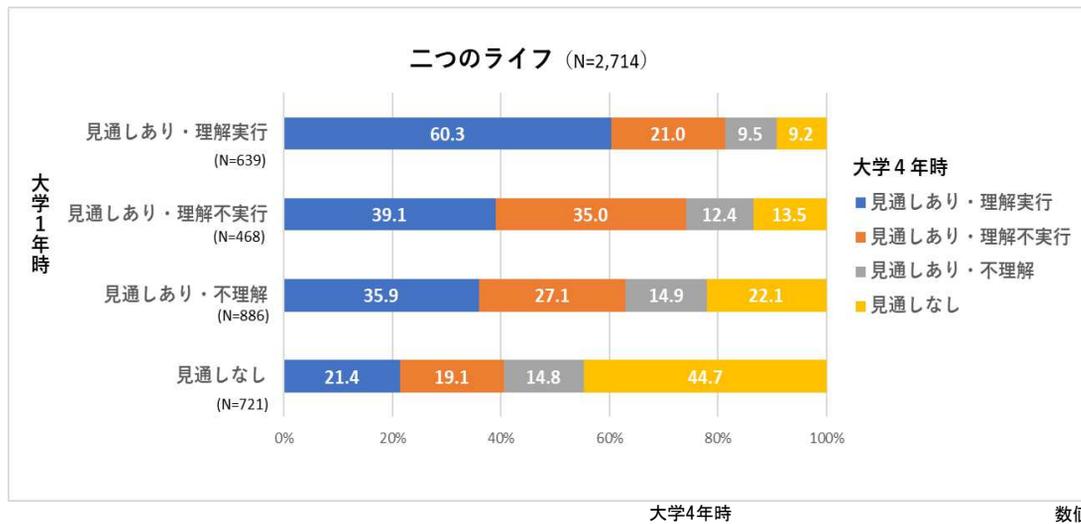
分析2-1 全体のクロス集計

手続き

全体データを用いて、大1と大4の二つのライフのステータスの関連を、クロス集計並びに χ^2 検定により分析をおこなった。

結果と考察

Pearsonの χ^2 検定の結果、効果量は小程度であるものの、大1と大4の二つのライフに有意差が見られた(下記の図表を参照)。残差分析の結果、見通しあり・不理解を除き、大1と大4の同じステータスのセルが有意に多いことがわかった。中でも、大1の見通しあり・理解実行(60.3%)と見通しなし(44.7%)の学生には、その傾向が強く見られた。



		見通しあり・理解実行	見通しあり・理解不実行	見通しあり・不理解	見通しなし	計
大学 1 年 時	見通しあり・理解実行	385 (60.3) ▲	134 (21.0) ▽	61 (9.5) ▽	59 (9.2) ▽	639 (100.0)
	見通しあり・理解不実行	183 (39.1)	164 (35.0) ▲	58 (12.4)	63 (13.5) ▽	468 (100.0)
	見通しあり・不理解	318 (35.9)	240 (27.1)	132 (14.9)	196 (22.1)	886 (100.0)
	見通しなし	154 (21.4) ▽	138 (19.1) ▽	107 (14.8)	322 (44.7) ▲	721 (100.0)
計		1,040 (38.3)	676 (24.9)	358 (13.2)	640 (23.6)	2,714 (100.0)

$\chi^2(9)=393.228, p<.001, \text{Cramer's } V=.22(\text{効果量小})$

残差分析の結果、有意に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す。

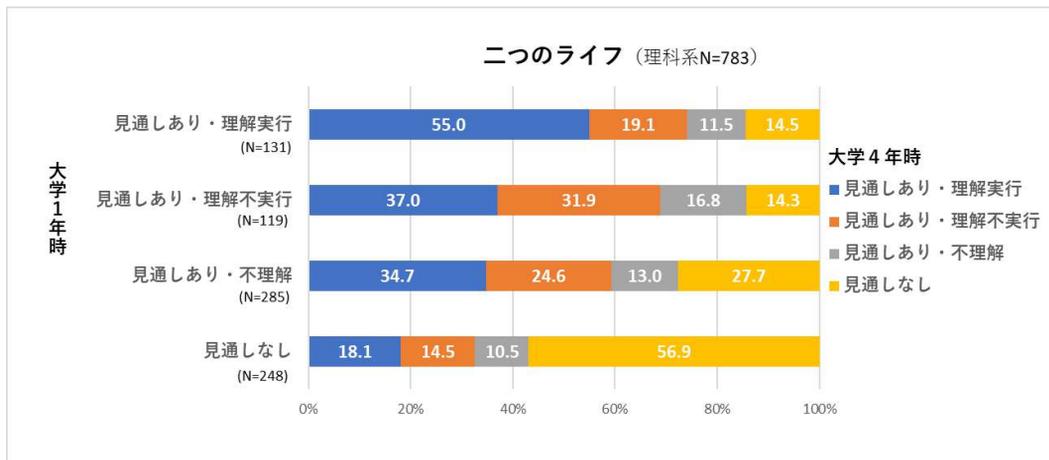
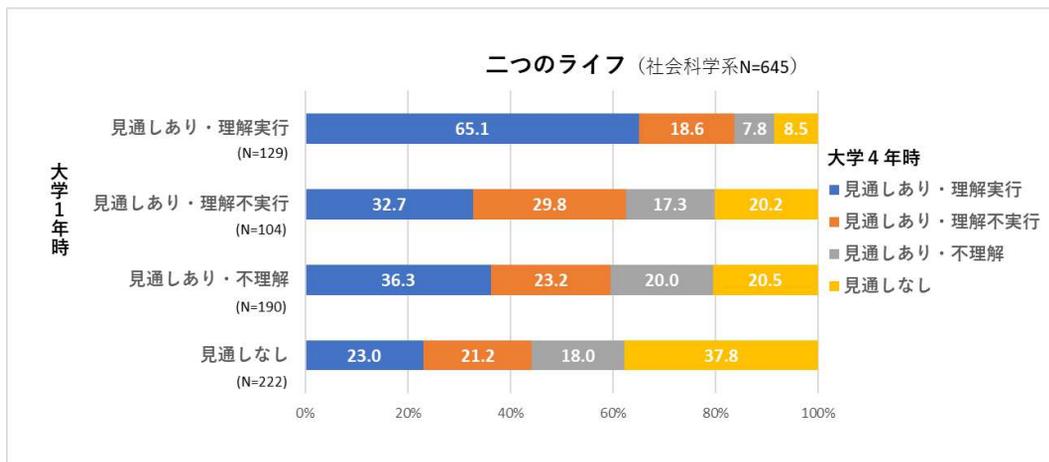
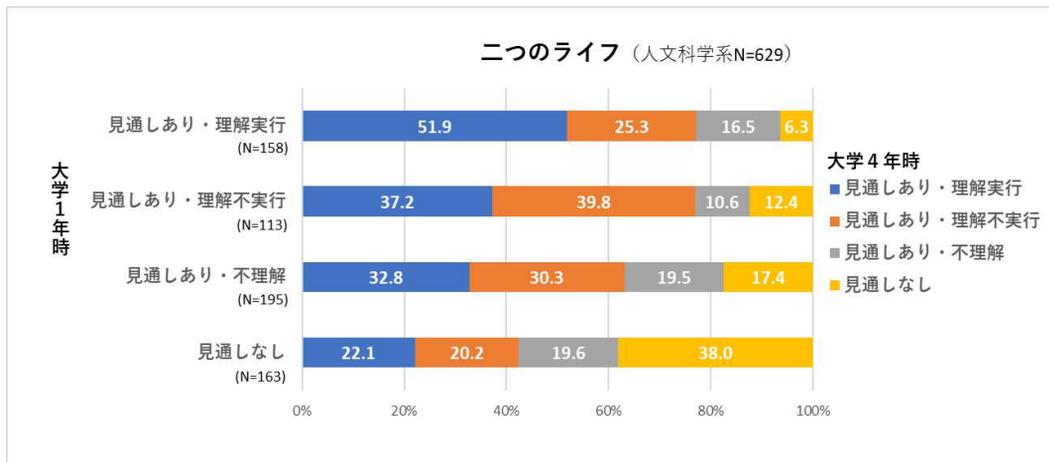
分析2-2 専門分野別に見た二つのライフの変化

手続き

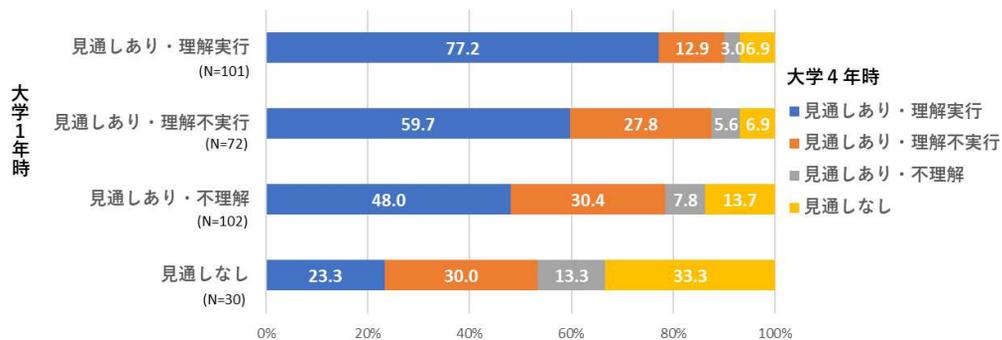
専門分野別のデータを用いて、大1と大4の二つのライフのステータスのクロス集計をおこなった。

結果と考察

専門分野ごとの細かな特徴はあるものの、おおむね分析2-1と同様の傾向が認められた。



二つのライフ (4年制医療系N=305)



二つのライフ (6年制医療系N=164)



＜属性別に見た二つのライフ: 大学1年時・4年時＞

数値は度数(%)

	性		社会階層				都市度		中高一貫		SSH参加・満足		高校の進学程度		地域移動					
	男性	女性	高	中	低	三大都市圏	地方中核都市圏	地方中核拠点都市	その他の地方都市	中高一貫校	それ以外	参加・満足	参加・不満足	不参加/わからない	難関公立大・私立大等に多数進学	中堅公立大・私立大に多数進学	その他の私立大・短大等に多数進学	あり	なし	
見通しあり・理解実行	371(20.8)	684(24.3)	337(25.2)	304(23.3)	306(21.2)	396(22.6)	117(21.0)	296(24.1)	179(23.7)	214(24.8)	842(22.4)	145(27.2)	45(23.0)	867(23.3)	227(22.3)	268(22.8)	362(22.2)	295(18.1)	388(17.3)	354(17.3)
見通しあり・理解不実行	282(15.8)	517(18.4)	214(16.0)	199(15.3)	308(17.6)	308(17.6)	101(18.1)	196(16.0)	125(16.6)	147(17.0)	657(17.5)	96(18.0)	21(10.7)	686(17.6)	161(15.8)	204(17.3)	295(18.1)	388(17.3)	354(17.3)	354(17.3)
見通しあり・不理解	602(33.8)	887(31.5)	432(32.4)	415(31.8)	477(33.1)	552(31.5)	186(33.4)	394(32.1)	251(33.3)	271(31.4)	1,224(32.6)	170(31.9)	64(32.7)	1,282(32.4)	339(33.1)	382(32.4)	526(32.3)	702(31.3)	684(33.5)	702(31.3)
見通しなし	527(29.6)	727(25.8)	352(26.4)	385(29.5)	366(25.4)	406(28.3)	153(27.5)	341(27.8)	199(26.4)	231(26.8)	1,034(27.5)	122(22.9)	66(33.7)	1,076(27.7)	294(28.8)	324(27.5)	448(27.5)	614(27.4)	557(27.3)	557(27.3)

$\chi^2(3)=17.167, p<.01$ $\chi^2(6)=21.825, p<.01$ $\chi^2(3)=2.277, n.s.$ $\chi^2(6)=17.157, p<.01$ $\chi^2(6)=2.683, n.s.$ $\chi^2(3)=5.547, n.s.$
 Cramers's V=.06 (効果量なし) Cramers's V=.05 (効果量なし) Cramers's V=.04 (効果量なし)

数値は度数(%)

	大学入試の形態												大学の所属学部・学科												大学層差	
	一般入試(センターのみ)	一般入試(大学個別試験あり)	指定校推薦	公募推薦	附属学校からの進学	A0入試	第一志望である	第一志望ではない	人文科学系	社会科学系	理科学系	芸術系	文理融合	4年制医療系	6年制医療系	65以上	60-64	50-59	49以下							
見通しあり・理解実行	118(22.7)	626(21.6)	56(22.1)	108(28.8)	19(29.2)	32(32.7)	469(22.2)	496(23.5)	231(23.0)	199(20.8)	208(16.3)▽	29(29.6)	45(23.9)	157(36.1)▲	89(37.1)▲	128(22.9)	105(21.7)	391(21.4)	240(24.2)	240(24.2)						
見通しあり・理解不実行	92(17.7)	499(17.2)	42(16.6)	76(20.3)	12(18.5)	12(12.2)	371(17.5)	366(17.3)	178(17.7)	157(16.4)	183(14.3)▽	21(21.4)	28(14.9)	101(23.2)▲	59(24.6)▲	108(19.4)	56(11.6)	318(17.4)	171(17.3)	171(17.3)						
見通しあり・不理解	165(81.8)	952(32.8)	89(35.2)	113(30.1)	18(27.7)	30(30.6)	714(33.8)	654(30.9)	320(31.9)	267(28.0)▽	471(36.9)▲	27(27.6)	64(34.0)	136(31.3)	74(30.8)	182(29.0)	165(34.2)	597(32.7)	322(32.5)	322(32.5)						
見通しなし	144(27.7)	823(28.4)	66(26.1)	78(20.8)	16(24.6)	24(24.5)	561(26.5)	599(28.3)	275(27.4)	332(34.8)▲	415(32.5)▲	21(21.4)	51(27.1)	41(9.4)▽	18(7.5)▽	160(28.7)	157(32.5)	521(28.5)	257(26.0)	257(26.0)						

$\chi^2(15)=26.310, p<.05$ $\chi^2(4)=6.666, n.s.$ $\chi^2(18)=240.327, p<.001$ Cramers's V=.14 (効果量小)
 $\chi^2(9)=20.284, p<.05$ Cramers's V=.04 (効果量なし)

数値は度数(%)

	性		社会階層				都市度		中高一貫		SSH参加・満足		高校の進学程度		地域移動					
	男性	女性	高	中	低	三大都市圏	地方中核都市圏	地方中核拠点都市	その他の地方都市	中高一貫校	それ以外	参加・満足	参加・不満足	不参加/わからない	難関公立大・私立大等に多数進学	中堅公立大・私立大に多数進学	その他の私立大・短大等に多数進学	あり	なし	
見通しあり・理解実行	389(39.3)	647(37.9)	322(39.6)	290(35.8)	351(39.8)	390(37.1)	126(40.5)	272(37.5)	167(39.2)	201(40.0)	838(37.9)	143(41.6)	33(31.1)	864(38.2)	233(38.1)	275(38.6)	347(38.5)	522(37.5)	472(39.0)	472(39.0)
見通しあり・理解不実行	212(21.4)	462(27.0)	197(24.2)	186(23.0)	242(27.5)	278(26.5)	82(26.4)	177(24.4)	97(22.8)	118(23.5)	557(25.2)	97(28.2)	26(24.5)	553(24.4)	145(23.7)	181(25.4)	236(26.2)	344(24.7)	306(25.3)	306(25.3)
見通しあり・不理解	125(12.6)	232(13.6)	102(12.5)	114(14.1)	118(13.4)	133(12.7)	39(12.5)	95(13.1)	56(13.1)	57(11.4)	301(13.6)	41(11.9)	17(16.0)	299(13.2)	85(13.9)	88(12.4)	114(12.6)	179(12.9)	167(13.8)	167(13.8)
見通しなし	265(26.7)	368(21.5)	193(23.7)	219(27.1)	170(19.3)	249(23.7)	64(20.6)	181(25.0)	106(24.9)	126(25.1)	513(23.2)	63(18.3)	30(28.3)	547(24.2)	148(24.2)	168(23.6)	205(22.7)	347(24.9)	264(21.8)	264(21.8)

$\chi^2(3)=16.008, p<.01$ $\chi^2(6)=17.618, p<.01$ $\chi^2(6)=10.546, n.s.$ $\chi^2(3)=3.162, n.s.$ $\chi^2(6)=19.42, n.s.$ $\chi^2(3)=5.570, n.s.$
 Cramers's V=.08 (効果量なし) Cramers's V=.06 (効果量なし) Cramers's V=.04 (効果量なし)

数値は度数(%)

	大学入試の形態												大学の所属学部・学科												大学層差	
	一般入試(センターのみ)	一般入試(大学個別試験あり)	指定校推薦	公募推薦	附属学校からの進学	A0入試	第一志望である	第一志望ではない	人文科学系	社会科学系	理科学系	芸術系	文理融合	4年制医療系	6年制医療系	65以上	60-64	50-59	49以下							
見通しあり・理解実行	114(37.4)	660(37.1)	57(37.7)	111(45.1)	19(51.4)	26(42.6)	493(38.8)	494(37.6)	217(36.1)	204(35.8)	257(33.3)▽	25(38.5)	40(35.1)	163(57.2)▲	69(44.8)	878(37.2)	109(36.8)	424(36.8)	219(38.2)	219(38.2)						
見通しあり・理解不実行	71(23.3)	445(25.0)	44(29.1)	63(25.6)	6(16.2)	15(24.6)	291(22.9)	357(27.2)	161(26.8)	134(23.5)	167(21.7)▽	21(32.3)	30(26.3)	72(25.3)	56(36.4)▲	591(25.0)	63(21.3)	298(25.9)	161(28.1)	161(28.1)						
見通しあり・不理解	35(11.5)	247(13.9)	18(11.9)	34(13.8)	4(10.8)	3(4.9)	169(13.3)	173(13.2)	102(17.0)▲	92(16.1)▲	94(12.2)	6(9.2)	18(15.8)	19(6.7)▽	9(5.8)▽	313(13.3)	48(16.2)	156(13.5)	58(10.1)	58(10.1)						
見通しなし	85(27.9)	429(24.1)	32(21.2)	38(15.4)	8(21.6)	17(27.9)	169(25.1)	290(22.1)	121(20.1)▽	140(24.6)	253(32.8)▲	13(20.0)	26(22.8)	31(10.9)▽	20(13.0)▽	93(27.4)	76(25.7)	274(23.8)	135(23.6)	135(23.6)						

$\chi^2(15)=23.561, n.s.$ $\chi^2(3)=4.71, n.s.$ $\chi^2(18)=135.347, p<.001$ Cramers's V=.13 (効果量小)
 $\chi^2(9)=20.284, p<.05$ Cramers's V=.04 (効果量なし)

分析3 就職活動との関連

参加者が大学4年生になり、多くの人は就職活動をおこなった（回答者2,712人名中1,880名、69.3%。ただし、34名の欠損を除く）。分析1-1の資質・能力のクラス、分析2の大学1年時と4年時の二つのライフを用いて就職活動の結果、第一志望の就職先との関連を分析した。

まとめ

- 資質・能力のクラスと就職活動の結果、第一志望の就職先との関連は認められなかった。
- 二つのライフ（大学1年時・4年時）と就職活動の結果との関連は認められなかったが、第一志望の就職先との関連は認められた。見通しあり・理解実行から見通しなしにかけて、第一志望の就職先に決まる割合が落ちていくことが明らかとなった。二つのライフの4年時の“見通しなし”により顕著に認められた。
- 属性別（性や社会階層など）に就職活動の結果、第一志望の就職先の頻度を分析した結果、大学の所属学部・学科のみ統計的な有意差が見られた。就職活動の結果では、社会科学系で“内定をとり就職活動を終えた”が多く、文理融合、4年制医療系で“現在も就職活動中である”が多かった。また理科系で“就職活動を断念、中止、延期した”が多く見られた。第一志望の就職先では、4年制医療系で“第一志望の就職先である”が多く、社会科学系、芸術系で“第一志望の就職先ではない”が多く見られた。

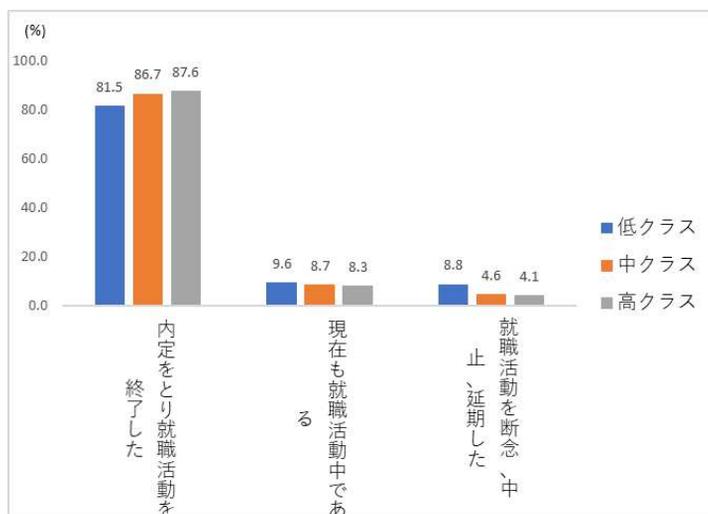
分析3-1 資質・能力と就職活動の結果との関連

手続き

分析1-1の資質・能力のクラスと就職活動の結果（“内定をとり就職活動を終了した” “現在も就職活動中である” “就職活動を断念、中止、延期した”）との関連を、クロス集計並びに χ^2 検定により分析をおこなった。

結果と考察

Pearsonの χ^2 検定の結果、有意差は見られたが、効果量はなしであった。高2から大4にかけての資質・能力のクラスと就職活動の結果には関連は認められないと言える。



数値は度数(%)

資質・能力のクラス	内定をとり就職活動を終了した	現在も就職活動中である	就職活動を断念、中止、延期した	全体
	低クラス	212 (81.5)	25 (9.6)	23 (8.8)
中クラス	850 (86.7)	85 (8.7)	45 (4.6)	980 (100.0)
高クラス	558 (87.6)	53 (8.3)	26 (4.1)	637 (100.0)

ス $\chi^2(4)=10.264, p<.05, \text{Cramer's } V=.05$ (効果量なし)

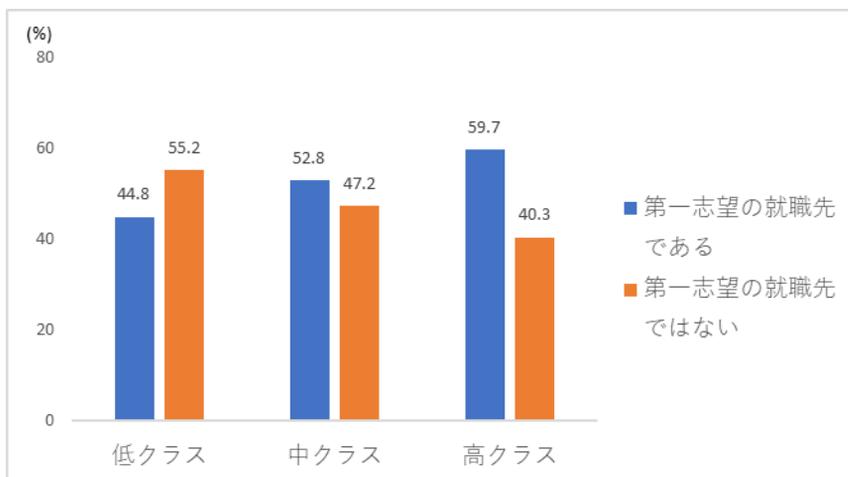
分析3-2 資質・能力と第一志望の就職先との関連

手続き

引き続き、資質・能力のクラスと第一志望の就職先であったかどうかとの関連を、クロス集計並びに χ^2 検定により分析をおこなった。

結果と考察

Pearsonの χ^2 検定の結果、有意差は見られたが、効果量はなしであった。高2から大4にかけての資質・能力のクラスと第一志望の就職先との関連は認められないと言える。



数値は度数(%)

資質・能力のクラス	第一志望の就職先である	第一志望の就職先ではない	全体
	低クラス	95 (44.8)	117 (55.2)
中クラス	449 (52.8)	401 (47.2)	850 (100.0)
高クラス	333 (59.7)	225 (40.3)	558 (100.0)

$\chi^2(2)=14.915, p<.01, \text{Cramer's } V=.10$ (効果量なし)

分析3-3 二つのライフと就職活動の結果との関連

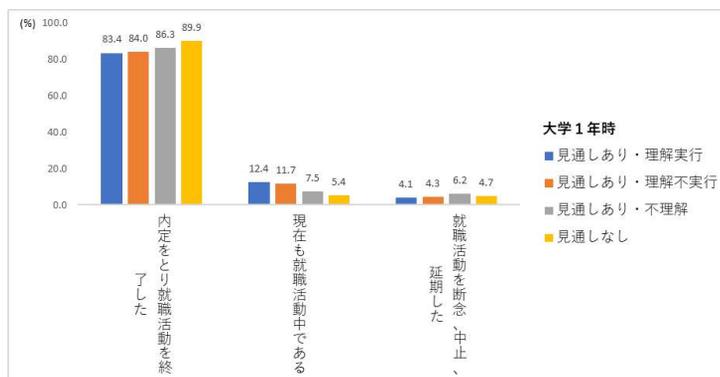
手続き

分析2で用いた大学1と大4の二つのライフと就職活動の結果との関連を、クロス集計並びに χ^2 検定により分析をおこなった。

結果と考察

Pearsonの χ^2 検定の結果、有意差は見られたが、効果量はなしであった。二つのライフ（大1・大4）と就職活動の結果との関連は認められないと言える。

<大学1年時の二つのライフ>

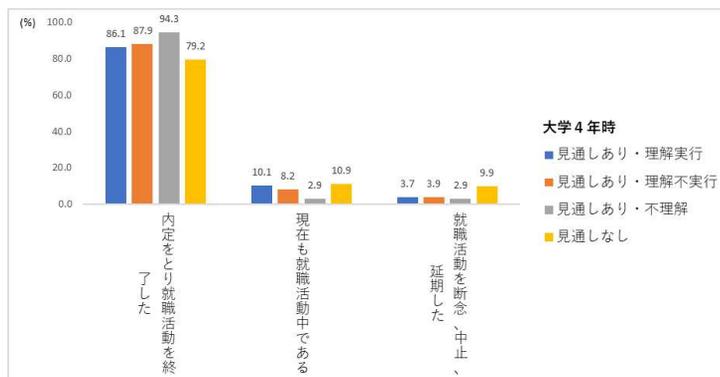


数値は度数(%)

二つのライフ(大1)	内定をとり就職活動を終了した	現在も就職活動中である	就職活動を断念、中止、延期した	全体
	見通しあり・理解実行	342 (83.4)	51 (12.4)	17 (4.1)
見通しあり・理解不実行	272 (84.0)	38 (11.7)	14 (4.3)	324 (100.0)
見通しあり・不理解	527 (86.3)	46 (7.5)	38 (6.2)	611 (100.0)
見通しなし	481 (89.9)	29 (5.4)	25 (4.7)	535 (100.0)

$\chi^2(6)=21.770, p<.01, \text{Cramer's } V=.06$ (効果量なし)

<大学4年時の二つのライフ>



数値は度数(%)

二つのライフ(大4)	内定をとり就職活動を終了した	現在も就職活動中である	就職活動を断念、中止、延期した	全体
	見通しあり・理解実行	603 (86.1)	71 (10.1)	26 (3.7)
見通しあり・理解不実行	428 (87.9)	40 (8.2)	19 (3.9)	487 (100.0)
見通しあり・不理解	264 (94.3)	8 (2.9)	8 (2.9)	280 (100.0)
見通しなし	327 (79.2)	45 (10.9)	41 (9.9)	413 (100.0)

$\chi^2(6)=45.800, p<.001, \text{Cramer's } V=.09$ (効果量なし)

分析3-4 二つのライフと第一志望の就職先との関連

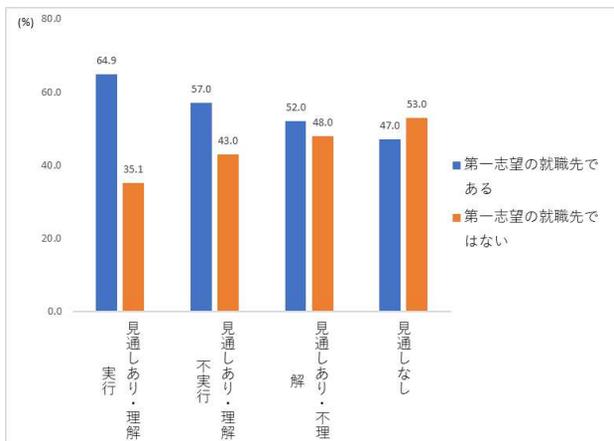
手続き

分析3-3に引き続いて、大1と大4の二つのライフと第一志望の就職先との関連を、クロス集計並びに χ^2 検定により分析をおこなった。

結果と考察

Pearsonの χ^2 検定の結果、有意差が見られ、小程度の効果量も示された。見通しあり・理解実行から見通しなしにかけて、第一志望の就職先に決まる割合が落ちていくことが明らかとなった。その傾向は、二つのライフの4年時の“見通しなし”でより顕著に認められた。

<大学1年時の二つのライフ>



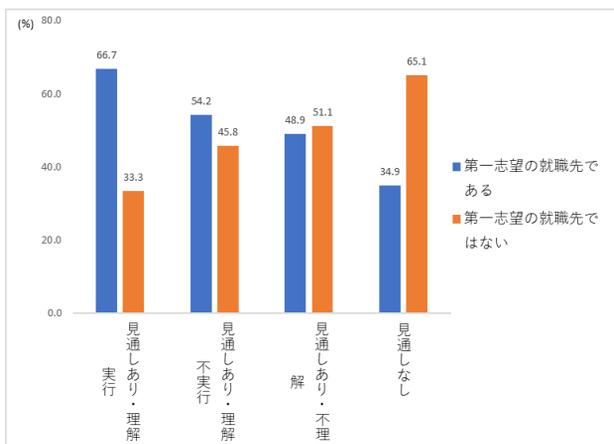
数値は度数(%)

二つのライフ (大1)	第一志望の就職先		全体
	ある	はない	
見通しあり・理解実行	222 (64.9) ▲	120 (35.1) ▽	342 (100.0)
見通しあり・理解不実行	155 (57.0)	117 (43.0)	272 (100.0)
見通しあり・不理解	274 (52.0)	253 (48.0)	527 (100.0)
見通しなし	226 (47.0) ▽	255 (53.0) ▲	481 (100.0)

$\chi^2(3)=27.757, p<.001, \text{Cramer's } V=.13$ (効果量小)

残差分析の結果、有意に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す。

<大学4年時の二つのライフ>



数値は度数(%)

二つのライフ (大4)	第一志望の就職先		全体
	ある	はない	
見通しあり・理解実行	402 (66.7) ▲	201 (33.3) ▽	603 (100.0)
見通しあり・理解不実行	232 (54.2)	196 (45.8)	428 (100.0)
見通しあり・不理解	129 (48.9) ▽	135 (51.1) ▲	264 (100.0)
見通しなし	114 (34.9) ▽	213 (65.1) ▲	327 (100.0)

$\chi^2(3)=89.991, p<.001, \text{Cramer's } V=.24$ (効果量小)

残差分析の結果、有意に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す。

<属性別に見た就職活動の結果>

	社会階層				都市度				中高一貫				SSH参加・満足				高校の進学程度				地球移動	
	男性	女性	高	中	低	三大都市圏	都市圏	地方中核都市圏	拠点都市	その他の地方都市	中高一貫校	それ以外	参加・満足	参加・不満足	不参加/わからない	難関公立大・私立大等に多数進学	中堅国公立大・私立大等に多数進学	その他の私立大・短大等に多数進学	あり	なし		
内定をとり就職活動を終えた	434(79.9)▽	1,182(89.1)▲	405(85.4)	491(86.0)	596(87.1)	631(85.7)	185(84.1)	448(89.4)	242(87.7)	243(86.5)	1,376(86.2)	165(82.9)	58(87.9)	1,399(86.7)	311(86.6)	437(87.6)	605(85.5)	860(87.0)	686(85.1)			
現在も就職活動中である	58(10.7)▲	104(7.8)▽	37(7.8)	50(8.8)	62(9.1)	71(9.4)	33(6.6)	33(6.6)	25(9.1)	21(7.5)	143(9.0)	19(5.5)	6(9.1)	139(8.6)	30(8.4)	35(7.0)	75(10.6)	88(8.9)	69(8.6)			
就職活動を断念、中止、延期した	51(9.4)▲	41(3.1)▽	32(6.8)	30(5.3)	26(3.8)	52(6.9)	8(6.8)	20(4.0)	9(3.3)	17(7.0)	77(4.8)	15(7.5)	2(3.0)	76(4.7)	18(6.0)	27(5.4)	28(4.0)	41(4.1)	51(6.3)			

$\chi^2(2)=38.330, p<0.001$ (効果量小) $\chi^2(4)=5.468, n.s.$ $\chi^2(6)=16.147, p<0.05$ $\chi^2(2)=1.322, n.s.$ $\chi^2(4)=3.871, n.s.$ $\chi^2(2)=4.356, n.s.$

Cramer's V=0.19 (効果量小)

Cramer's V=0.07 (効果量なし)

数値は度数(%)

	大学入試の形態										大学の所属学部・学科										地球移動	
	一般入試(センターのみ)	一般入試(大)	指定校推薦	公募推薦	附属学校からの進学	AO入試	第一志望である	第一志望ではない	人文科学系	社会科学系	理科学系	芸術系	文芸融合	4年制医系	65以上	60-64	50-59	49以下	あり	なし		
内定をとり就職活動を終えた	200(82.3)	1,015(86.0)	111(91.0)	150(89.3)	26(81.3)	32(84.2)	723(85.5)	816(86.6)	448(86.5)	476(89.5)▲	273(83.2)▽	40(81.6)	76(79.2)▽	212(87.6)	134(83.8)	155(89.6)	700(87.6)	386(83.7)				
現在も就職活動中である	28(11.5)	99(8.3)	10(8.2)	12(7.1)	6(18.8)	3(7.9)	75(8.9)	82(8.7)	50(9.7)	33(6.2)▽	19(5.8)▽	5(10.2)	14(14.6)▲	28(11.6)▲	12(7.5)	11(6.4)	56(7.0)	53(11.5)				
就職活動を断念、中止、延期した	15(6.2)	67(5.7)	1(0.8)	6(3.6)	0(0.0)	3(7.9)	48(5.7)	44(4.7)	20(3.9)	23(4.3)	36(11.0)▲	4(8.2)	6(6.3)	2(0.8)	7(4.0)	43(5.4)	22(4.8)					

$\chi^2(10)=16.203, n.s.$ $\chi^2(2)=954, n.s.$ $\chi^2(10)=49.401, p<0.001$ (効果量小) $\chi^2(6)=13.303, p<0.05$ (効果量なし)

*1: 受験分析の結果、有意に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す

*2: 4年制医系系は度数が少なく分析から除外した。

<属性別に見た第一志望の就職先>

	社会階層				都市度				中高一貫				SSH参加・満足				高校の進学程度				地球移動	
	男性	女性	高	中	低	三大都市圏	都市圏	地方中核都市圏	拠点都市	その他の地方都市	中高一貫校	それ以外	参加・満足	参加・不満足	不参加/わからない	難関公立大・私立大等に多数進学	中堅国公立大・私立大等に多数進学	その他の私立大・短大等に多数進学	あり	なし		
第一志望の就職先である	214(49.3)	661(55.9)	231(57.0)	257(52.3)	314(52.7)	328(52.0)	96(51.9)	251(56.0)	142(58.7)	119(49.0)	757(55.0)	103(82.4)	30(51.7)	744(53.2)	166(53.4)	252(57.7)	314(51.9)	455(52.9)	371(54.1)			
第一志望の就職先ではない	220(60.7)	521(44.1)	174(43.0)	238(47.7)	282(47.3)	303(48.0)	89(48.1)	197(44.0)	100(41.3)	124(51.0)	619(45.0)	62(87.6)	28(48.3)	655(46.8)	145(46.6)	181(25.4)	236(26.2)	405(47.1)	315(45.9)			

$\chi^2(1)=5.592, p<0.05$ (効果量小) $\chi^2(2)=2.024, n.s.$ $\chi^2(3)=4.205, n.s.$ $\chi^2(1)=3.038, n.s.$ $\chi^2(2)=5.211, n.s.$ $\chi^2(2)=3.482, n.s.$ $\chi^2(1)=2.12, n.s.$

Cramer's V=0.06 (効果量なし)

Cramer's V=0.09 (効果量なし)

Cramer's V=0.23 (効果量小)

Cramer's V=0.09 (効果量なし)

分析4 大学時代・就職活動のふり返し評価

就職活動をおこなった人を対象に（分析3を参照）、大学時代・就職活動をふり返って○（肯定的評価）、×（否定的評価）のいずれかをつけてもらい、その組み合わせと、分析1-1の資質・能力のクラス、分析2の二つのライフ（大学1年時・4年時）との関連を検討した。

まとめ

- 資質・能力の高クラスの人、大学時代・就職活動を肯定的にふり返る確率が高く、低クラスの人、大学時代か就職活動のいずれか、あるいは両方において否定的にふり返る確率が高い。低クラスの半数の人は、内定はとれるものの、満足のいく就職活動で終わっていない可能性が示唆される。
- 見通しあり・理解実行の人は大学時代・就職活動を肯定的にふり返し、見通しなしの人は、とくに就職活動を否定的にふり返る確率が高い。
- 属性別（性や社会階層など）に○×の組み合わせの頻度を分析した結果、大学の所属学部・学科のみ統計的な有意差が見られた。とくに、人文科学系で○×、文理融合で××、4年制医療系で○○、×○が多く認められた。

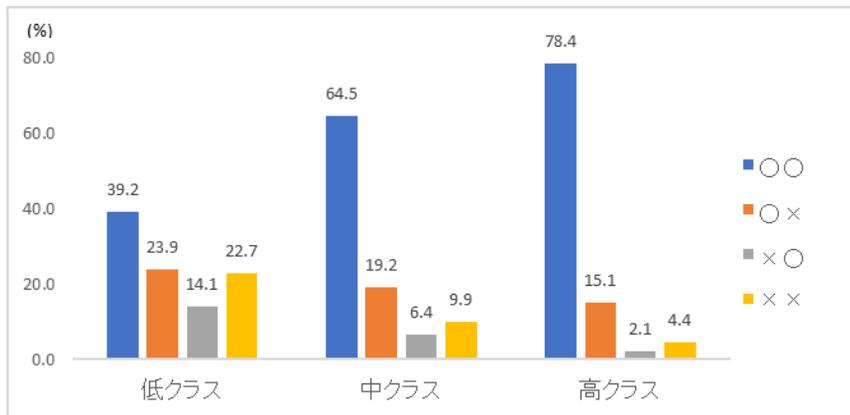
分析4-1 資質・能力との関連

手続き

就職活動をおこなった人を対象に（分析3を参照）、大学時代・就職活動をふり返って○（肯定的評価）、×（否定的評価）のいずれかをつけてもらい、その組み合わせと、分析1-1の資質・能力のクラスとの関連を、クロス集計並びに χ^2 検定により分析をおこなった。教示文などの詳細は、「付録：使用変数の説明」（p.36～）を参照のこと。

結果と考察

Pearsonの χ^2 検定の結果、効果量は小程度であるものの、資質・能力のクラスと大学時代・就職活動の○×の組み合わせとの関連には有意差が見られた（図表を参照）。残差分析の結果、高クラスの○○と、低クラスの○×、×○、××のセルが有意に多いことがわかった。このことは、資質・能力の高クラスの人、大学時代・就職活動を肯定的にふり返る確率が高く、低クラスの人、大学時代か就職活動のいずれか、あるいは両方において否定的にふり返る確率が高いことを示唆している。とくに、低クラスで就職活動が×である人（すなわち、○×、××の合算値）は46.6%もあり、彼らは内定はとれるものの、満足のいく就職活動で終わっていない可能性が示唆される。



資質・能力のクラス	大学時代・就職活動の評価（肯定的○ 否定的×）				数値は度数(%)
	○○	○×	×○	××	
低クラス	100 (39.2) ▽	61 (23.9) ▲	36 (14.1) ▲	58 (22.7) ▲	255 (100.0)
中クラス	627 (64.5)	187 (19.2)	62 (6.4)	96 (9.9)	972 (100.0)
高クラス	497 (78.4) ▲	96 (15.1) ▽	13 (2.1) ▽	28 (4.4) ▽	634 (100.0)

$\chi^2(6)=158.610, p<.01, \text{Cramer's } V=.21$ (効果量小)

残差分析の結果、有意に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す。

分析4-2 二つのライフとの関連

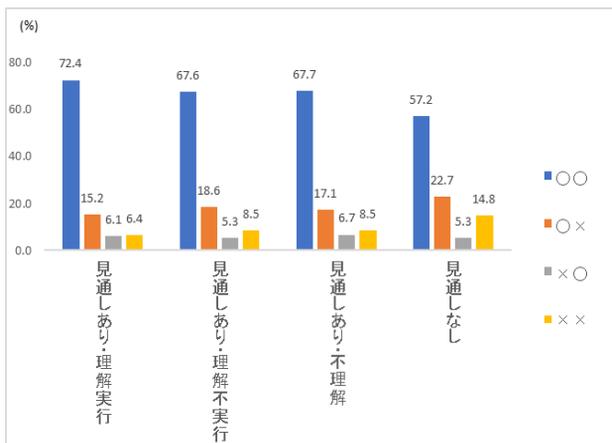
手続き

分析2で用いた大1と大4の二つのライフと大学時代・就職活動の評価（〇×）との関連を、クロス集計並びに χ^2 検定により分析をおこなった。

結果と考察

Pearsonの χ^2 検定の結果、大1では有意差は見られたが、効果量はなしであった。大4では有意差が見られ、効果量も小程度であった。残差分析の結果、見通しあり・理解実行の〇〇と、見通しなしの〇×、××のセルが有意に多いことがわかった。このことは、見通しあり・理解実行の人は大学時代・就職活動を肯定的にふり返り、見通しなしの人は、とくに就職活動を否定的にふり返る確率が高いことを示唆している。

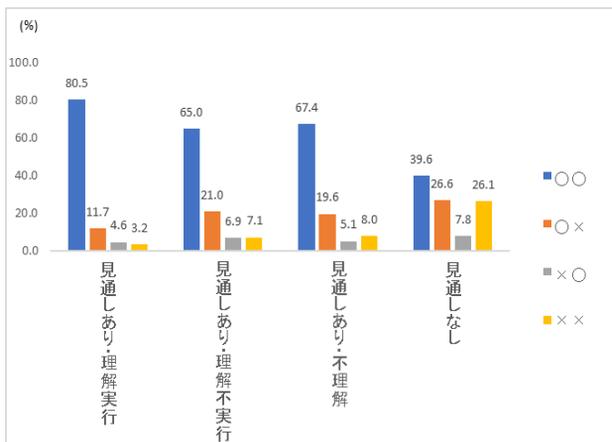
<大学1年時の二つのライフ>



	〇〇	〇×	×〇	××	全体
見通しあり・理解実行	296 (72.4)	62 (15.2)	25 (6.1)	26 (6.4)	409 (100.0)
見通しあり・理解不実行	215 (67.6)	59 (18.6)	17 (5.3)	27 (8.5)	318 (100.0)
見通しあり・不理解	412 (67.7)	104 (17.1)	41 (6.7)	52 (8.5)	609 (100.0)
見通しなし	302 (57.2)	120 (22.7)	28 (5.3)	78 (14.8)	528 (100.0)

$\chi^2(9)=38.329, p<.001, \text{Cramer's } V=.08$ (効果量なし)

<大学4年時の二つのライフ>



	〇〇	〇×	×〇	××	全体
見通しあり・理解実行	562 (80.5) ▲	82 (11.7) ▽	32 (4.6) ▽	22 (3.2) ▽	698 (100.0)
見通しあり・理解不実行	319 (65.0)	103 (21.0)	34 (6.9)	35 (7.1) ▽	491 (100.0)
見通しあり・不理解	186 (67.4)	54 (19.6)	14 (5.1)	22 (8.0)	276 (100.0)
見通しなし	158 (39.6) ▽	106 (26.6) ▲	31 (7.8)	104 (26.1) ▲	399 (100.0)

$\chi^2(9)=246.849, p<.001, \text{Cramer's } V=.21$ (効果量小)
残差分析の結果、有意に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す。

分析4-3 肯定的評価・否定的評価の理由

手続き

大学時代・就職活動の○×の理由として“あてはまる”と選んだものに1点、無回答を0点と得点化し平均点を算出した。教示文などの詳細は、「付録：使用変数の説明」(p.36～)を参照のこと。

結果と考察

大学時代・就職活動の肯定的・否定的評価(○×)の理由で多く見られた3つは下記のとおりである。

(1) 大学時代○の理由

- ✓友人関係に恵まれた(0.71)
- ✓さまざまな人や価値観にふれた(0.59)
- ✓勉強を頑張った(0.57)

(2) 大学時代×の理由

- ✓だらだら過ごしていた(0.60)
- ✓やりたいことや目的意識がなかった(0.52)
- ✓勉強しなかった(0.46)

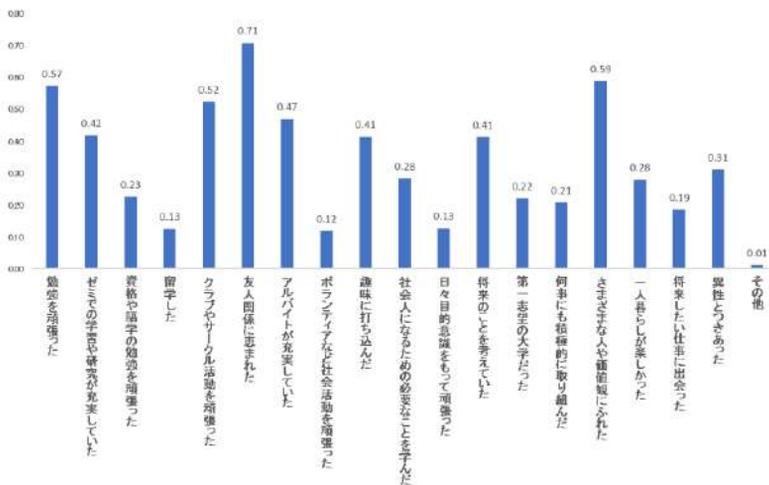
(3) 就職活動○の理由

- ✓第一志望に就職が決まった(0.52)
- ✓自分のやりたいことをしっかり考えた(0.48)
- ✓いろいろな人と話をすることができた(0.45)

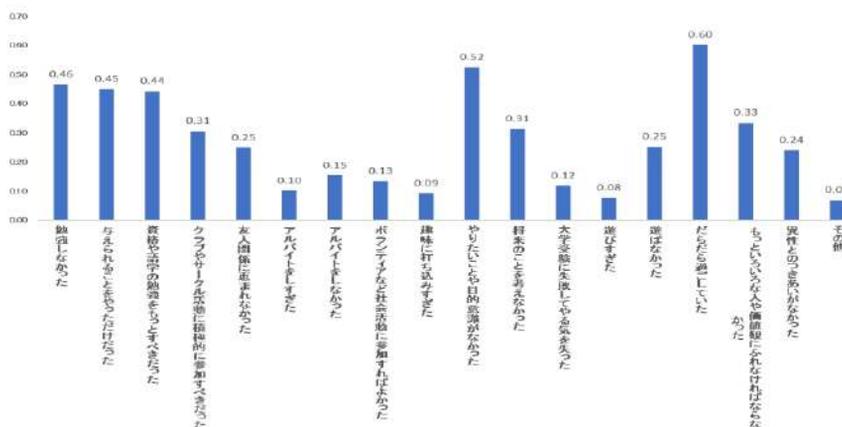
(4) 就職活動×の理由

- ✓自分が何をしたいのかよくわからなかった(0.49)
- ✓就職活動をしっかりやらなかった(0.42)
- ✓不満足の結果で終わった(0.35)

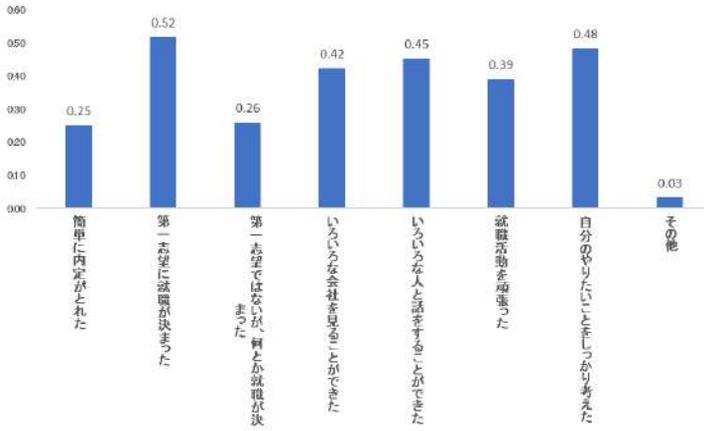
<大学時代○の理由> N=2,284



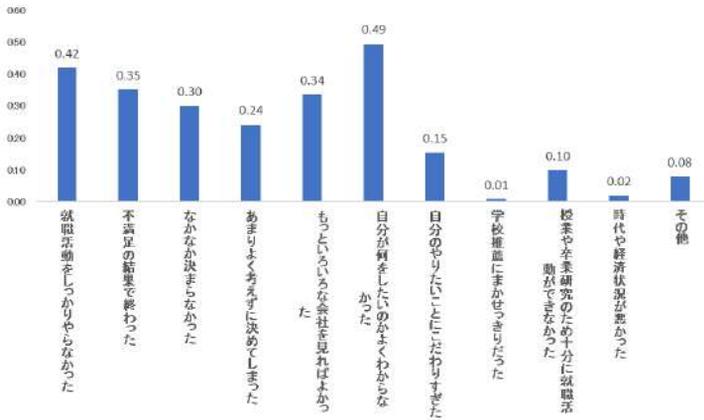
<大学時代×の理由> N=426



<就職活動○の理由> N=1,336



<就職活動×の理由> N=528



＜属性別に見た大学生生活・就職活動の評価＞

数値は度数(%)

	性		社会階層				都市度			中高一貫		SSH参加・満足			高校の進学程度		地域移動		
	男性	女性	高	中	低	三大都市圏	地方中核都市圏	地方中核拠点都市	その他の地方都市	中高一貫校	それ以外	参加・満足	参加・不満足	不参加/わからない	難関国立大・私立大等に多数進学	中堅国立大・私立大等に多数進学	その他の私立大・短大等に多数進学	あり	なし
〇〇	336 (62.1)	884 (67.3)	332 (69.3)	386 (65.1)	433 (64.4)	490 (66.6)	139 (63.5)	329 (65.3)	178 (64.3)	182 (65.0)	1,041 (65.8)	132 (66.3)	33 (6.16)	1,060 (66.2)	238 (66.9)	318 (63.6)	454 (65.5)	665 (68.1)	506 (63.2)
〇×	103 (19.0)	239 (18.2)	88 (18.4)	106 (18.9)	121 (18.0)	132 (17.9)	42 (19.2)	95 (18.8)	56 (20.2)	59 (21.1)	288 (18.1)	38 (19.1)	16 (25.0)	291 (18.2)	65 (18.3)	97 (19.4)	133 (19.2)	161 (16.5)	165 (20.6)
×〇	43 (7.9)	68 (5.2)	18 (3.8)	32 (5.7)	52 (7.7)	53 (7.2)	9 (4.1)	29 (5.8)	16 (5.8)	11 (3.9)	100 (6.3)	8 (4.0)	5 (7.8)	98 (6.1)	20 (5.6)	24 (4.8)	49 (7.1)	60 (6.1)	46 (5.7)
××	59 (10.9)	123 (9.4)	41 (8.6)	58 (10.3)	66 (9.8)	61 (8.3)	29 (13.2)	51 (10.1)	27 (9.7)	28 (10.0)	154 (9.7)	21 (10.6)	10 (15.6)	152 (9.5)	33 (9.3)	61 (12.2)	57 (8.2)	90 (9.2)	84 (10.5)

$\chi^2(3)=7.564, n.s.$ $\chi^2(6)=9.641, n.s.$ $\chi^2(9)=8.374, n.s.$ $\chi^2(3)=3.473, n.s.$ $\chi^2(6)=7.786, n.s.$ $\chi^2(9)=7.938, n.s.$ $\chi^2(3)=6.523, n.s.$

数値は度数(%)

	大学入試の形態										大学の所属学部・学科										大学偏差値	
	一般入試(センターのみ)	一般入試(大学個別試験あり)	指定校推薦	公募推薦	附属学校からの進学	AO入試	第一志望である	第一志望ではない	人文科学系	社会科学系	理科学系	芸術系	文理融合	4年制医療系	65以上	60-64	50-59	49以下				
〇〇	149 (62.9)	755 (64.8)	91 (72.8)	132 (78.6)	16 (53.3)	21 (53.8)	563 (67.7)	602 (64.2)	326 (64.0)	351 (67.1)	207 (62.2)	27 (55.1)	56 (59.6)	182 (77.1)▲	98 (62.8)	118 (68.2)	531 (66.7)	287 (62.5)				
〇×	44 (18.6)	222 (19.0)	21 (16.8)	17 (10.1)	8 (26.7)	10 (25.6)	146 (17.5)	179 (19.1)	116 (22.8)▲	93 (17.8)	60 (18.0)	13 (26.5)	17 (18.1)	19 (8.1)	41 (26.3)	29 (16.8)	136 (17.1)	89 (19.4)				
×〇	16 (6.8)	68 (5.8)	6 (4.8)	8 (4.8)	3 (10.0)	4 (10.3)	46 (5.5)	59 (6.3)	18 (3.5)▽	25 (4.8)	27 (8.1)	4 (8.2)	6 (6.4)	24 (10.2)▲	4 (2.6)	8 (4.6)	49 (6.2)	36 (7.8)				
××	28 (11.8)	121 (10.4)	7 (5.6)	11 (6.5)	3 (10.0)	4 (10.3)	77 (9.3)	97 (10.4)	49 (9.6)	54 (10.3)	39 (11.7)	5 (10.2)	15 (16.0)▲	11 (4.7)▽	13 (8.3)	18 (10.4)	80 (10.1)	47 (10.2)				

$\chi^2(15)=24.524, n.s.$ $\chi^2(3)=2.341, n.s.$ $\chi^2(15)=55.665, n.s.$ $\chi^2(10)=10.001, n.s.$ $\chi^2(9)=14.115, n.s.$

※偏差分析の結果、有意に多いセルに▲、少ないセルに▽を記す
※4年制医療系は度数が少なく分析から除外した。

付録：使用変数の説明

● 資質・能力(高2, 大1, 大2, 大3, 大4)

資質・能力に関する18項目を下記のとおり尋ねた。

「最近のあなたをふり返って、下記の事柄がどの程度身についたと感じますか」(5件法)

- | | |
|---|-------------------------------|
| (1) 計画や目標を立てて日々を過ごすことができる | (10) 時間を有効に使うことができる |
| (2) 社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる | (11) 新しいアイデアを得たり発見したりすることができる |
| (3) リーダーシップをとることができる | (12) 困難なことでもチャレンジすることができる |
| (4) 図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たりわからないことを調べたりすることができる | (13) 人の話を聞くことができる |
| (5) 他の人と議論することができる | (14) 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる |
| (6) 自分の言葉で文章を書くことができる | (15) 人に対して思いやりを持つことができる |
| (7) 人前で発表をすることができる | (16) 忍耐強く物事に取り組むことができる |
| (8) 他の人と協力して物事に取り組める | (17) 異文化や世界に関心を持つことができる |
| (9) コンピュータやインターネットを操作することができる | (18) 自分を客観的に理解することができる |

本研究では、因子分析の結果を見て4因子で整理し、因子負荷の高い項目を用いて加算平均をし分析をおこなった。

- (1) 他者理解力：項目(13)(14)(15)の加算平均。α=.77 / .80 / .82 / .81 / .79
(2) 計画実行力：項目(1)(10)(12)(16)の加算平均。α=.77 / .76 / .77 / .78 / .78
(3) コミュニケーション・リーダーシップ力：項目(3)(5)(6)(7)(8)の加算平均。α=.81 / .79 / .82 / .80 / .79
(4) 社会文化探究心：項目(2)(4)(17)の加算平均。α=.61 / .54 / .60 / .52 / .54

*高2～大4の順で示す。

*項目(9)(11)(18)は因子分析の結果、因子負荷量が低く、分析から除外している。

● 成績(大1, 大3, 大4)

「あなたの成績は平均してどれくらいですか。もっとも近い番号を1つ選んでください。」

- (6) 履修した科目の80%以上が優(80点以上)の成績である (3) 履修した科目の20～40%未満が優(80点以上)の成績である
(5) 履修した科目の60～80%未満が優(80点以上)の成績である (2) 履修した科目の20%以下が優(80点以上)の成績である
(4) 履修した科目の40～60%未満が優(80点以上)の成績である (1) その他(わからない、覚えていない、など)

本研究では、(1)を欠損値として処理して分析をおこなった。

● 主体的な学習態度(大1, 大3, 大4)

「以下のそれぞれの項目内容は、あなたにどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つ選んで、数字に○をつけてください。」(5件法)

*授業や場合によって変わるかもしれませんが、「一般的にこの程度」という感覚でお答えください。

*課題、プレゼンテーション、レポートの経験がない方は、「出されたらどのように取り組むか」ということを想定してお答えください。

- (1) レポートや課題はただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い*
(2) レポートは満足がいくように仕上げる
(3) 授業には意欲的に取り組む
(4) 課題には最小限の努力で取り組む*
(5) 単位さえもらえればよいという気持ちで授業に出る*
(6) 課題は納得いくまで取り組む
(7) 課されたレポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する
(8) 授業はただぼうっと聞いている*
(9) プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫なように十分に調べる

【出典】

畑野快・溝上慎一(2013). 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討 日本教育工学会論文誌, 37(1), 13-21.

で開発した「主体的な授業態度」尺度を、畑野(2013)にならって、「主体的な学習態度」尺度と名称を変えて使用している。

畑野快(2013). 大学生の内発的動機づけが自己調整学習方略を媒介して主体的な学習態度に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 37(Suppl.), 81-84.

本研究では、逆転項目(*)を反転させて、加算平均して分析をおこなった。大1(α=.85)、大3(α=.87)、大4(α=.88)

● アクティブラーニング外化(大1, 大3, 大4)

「大学(短大・専門学校)で、話し合いや発表のある授業に対して、以下の項目のような態度をどの程度とっていましたか。それぞれの項目について、もっとも近い選択肢を1つ選んでください。」(4件法)

*そういう授業が全くなかった人は、「あてはまらない」を選んでください。

- (1) 議論や発表の中で自分の考えをはっきりと示す
(2) 根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う
(3) クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える

本研究では、加算平均して分析をおこなった。大1(α=.84)、大3(α=.82)、大4(α=.86)

● 二つのライフ(大1, 大3, 大4)

Q1「あなたは、自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っていますか。」

- (1) 持っている
- (2) 持っていない

Q2「あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのか分かっていますか。またそれを実行していますか。最もあてはまるものを1つお知らせください。」

- (1) 何をすべきか分かっているし、実行もしている
- (2) 何をすべきかは分かっているが、実行はできていない
- (3) 何をすべきかはまだ分からない

Q1、Q2の回答より、

- (4) 見通しあり・理解実行(Q1の(1)+Q2の(1)) →(3)
- (3) 見通しあり・理解不実行(Q1の(1)+Q2の(2)) →(2)
- (2) 見通しあり・不理解(Q1の(1)+Q2の(3)) →(2)
- (1) 見通しなし(Q1の(2)) →(1)

のステータスを作成し、それを(3)(2)(1)に再分類して得点化し、分析をおこなった。

【出典】

二つのライフの説明、ステータス、再分類・得点化については下記の文献を参照のこと。

保田江美・溝上慎一(2014). 初期キャリア以降の探究―「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に 中原淳・溝上慎一編 活躍する組織人の探究―大学から企業へのトランジション― 東京大学出版会 pp.139-173.

● (大学生の一週間の生活(大1, 大3, 大4)

「一週間の生活を振り返って、あなたは次の活動にどれくらいの時間を費やしていますか。一週間の平均的な時間数を記入例を参考にして記入してください。」

【出典】

京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会主催『大学生のキャリア意識調査2013』調査票
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/transmission/investigation/about/>

No	活動内容	記入例	
1	授業や実験に参加する	15 時間	時間
2	授業に関する勉強(予習や復習、宿題・課題など)をする	5 時間	時間
3	授業とは関係のない勉強を自主的にする	0 時間	時間
4	友達と会う、遊ぶ	5 時間	時間
5	クラブ・サークル活動をする	12 時間	時間
6	コンパや懇親会などに参加する	3 時間	時間
7	アルバイトをする	8 時間	時間
8	社会貢献活動をする(ボランティアやNPOの活動など)	0 時間	時間
9	テレビを見る	20 時間	時間
10	電話、LINE、メール交換、SNS(mixiやFacebookなど)をする	14 時間	時間
11	インターネットサーフィンをする	7 時間	時間
12	ゲーム(ゲーム機・コンピューターゲーム・オンラインゲーム)をする	0 時間	時間
13	勉強のための本(新書や専門書など)を読む	0 時間	時間
14	娯楽のための本(小説・一般書など、マンガや雑誌を除く)を読む	3 時間	時間
15	マンガや雑誌を読む	5 時間	時間
16	新聞を読む	0 時間	時間
17	通学にかかる時間	10 時間	時間

● 就職活動の結果(大4)

「あなたは就職活動を終了しましたか。もっともあてはまるものを1つ選んでください。」

- (1) 就職活動はしていない
- (2) 内定をとり、就職活動を終了した
- (3) 現在も就職活動中である
- (4) 就職活動を断念、中止、延期した

本研究では、(1)を欠損値として処理して分析をおこなった。

● 第一志望の就職先(大4)

「最終的に決定した就職先は第一志望でしたか。もっともあてはまるものを1つ選んでください。」

- (1) 第一志望の就職先であり、満足のいく就職先である
- (2) 第一志望の就職先ではないが、満足のいく就職先である
- (3) 第一志望の就職先であるが、満足のいかない就職先である
- (4) 第一志望の就職先でなく、満足のいかない就職先である

本研究では、(1)(3)を“第一志望の就職先である”、(2)(4)を“第一志望の就職先ではない”と再分類して、分析をおこなった。

● 大学時代・就職活動のふり振り返り評価(大4)

Q1「あなたは、「大学時代(6年制学部の方は、大学4年間)」「就職活動」の自分の過ごし方やその結果を振り返って、あてて○(肯定的)か×(否定的)で評価すると、どのようになりますか。もっとも近いものをそれぞれ1つ選んでください。」

- (1) 大学時代 ○(肯定的) ×(否定的)
(2) 就職活動 ○(肯定的) ×(否定的) 就職活動をしなかった

Q2「大学時代」を○(肯定的)とお答えになった方にお尋ねします。あなたが肯定的とお答えになった理由は何ですか。あてはまるものをすべてを選んでください。」

- (1) 勉強を頑張った
(2) ゼミでの学習や研究が充実していた
(3) 資格や語学の勉強を頑張った
(4) 留学した
(5) クラブやサークル活動を頑張った
(6) 友人関係に恵まれた
(7) アルバイトが充実していた
(8) ボランティアなど社会活動を頑張った
(9) 趣味に打ち込んだ
(10) 社会人になるための必要なことを学んだ

Q3「大学時代」を×(否定的)とお答えになった方にお尋ねします。あなたが否定的とお答えになった理由は何ですか。あてはまる番号すべてを選んでください。」

- (1) 勉強しなかった (11) 将来のことを考えなかった
(2) 与えられることをやっただけだった (12) 大学受験に失敗してやる気を失った
(3) 資格や語学の勉強をもっとすべきだった (13) 遊びすぎた
(4) クラブやサークル活動に積極的に参加すべきだった (14) 遊ばなかった
(5) 友人関係に恵まれなかった (15) だらだら過ごしていた
(6) アルバイトをしすぎた (16) もっといろいろな人や価値観にふれるべきだった
(7) アルバイトをしなかった (17) 彼氏・彼女との交際がなかった
(8) ボランティアなど社会活動に参加すべきだった (18) その他()
(9) 趣味に打ち込みすぎた
(10) やりたいことや目的意識がなかった

Q4「就職活動」を○(肯定的)とお答えになった方にお尋ねします。あなたが肯定的とお答えになった理由は何ですか。あてはまる番号すべてを選んでください。」

- (1) 簡単に内定がとれた
(2) 第一志望に就職が決まった
(3) 第一志望ではないが、何とか就職が決まった
(4) いろいろな会社を見ることができた
(5) いろいろな人と話することができた
(6) 就職活動を頑張った
(7) 自分のやりたいことをしっかり考えた
(8) その他()

Q5「就職活動」を×(否定的)とお答えになった方にお尋ねします。あなたが否定的とお答えになった理由は何ですか。あてはまる番号すべてを選んでください。」

- (1) 就職活動をしっかりやらなかった
(2) 不満足の結果で終わった
(3) なかなか決まらなかった
(4) あまりよく考えずに決めてしまった
(5) もっといろいろな会社を見ればよかった
(6) 自分が何をしたいのかわからなかった
(7) 自分のやりたいことにこだわりすぎた
(8) 学校推薦にまかせっきりだった
(9) 授業や卒業研究のため十分に就職活動ができなかった
(10) 時代や経済状況が悪かった
(11) その他()

本研究では、“あてはまる”とした項目を“1”、それ以外を“0”と得点化し、平均点(0-1のレンジ)を算出して分析をおこなった。

● 社会階層(高校卒業後)

父の学歴、母の学歴、世帯年収の3変数の得点を標準化して、加算平均し、(3) 高、(2) 中、(1) 低 と分類した。いずれかの変数が欠損だった場合には、2変数を用いて同様に加算平均した。

①あなたのご両親(またはそれにかわる方)の最終学歴をおたずねします。あてはまる番号を下の空欄に記入してください。

- | | | |
|---|-------------|---------|
| (1) 中学まで | (4) 短大や高専まで | (7) 不明 |
| (2) 高校まで | (5) 大学まで | (8) いない |
| (3) 専修学校や各種学校(料理、コンピュータ、洋裁、デザイン、美容師などの学校)まで | (6) 大学院まで | |
- *(7)(8)は欠損値として処理

A. お父さん(またはそれにかわる方)の最終学歴 ()

B. お母さん(またはそれにかわる方)の最終学歴 ()

②あなたが高校を卒業した頃のご家族全体の収入は次の中のどれに近いですか。

*あなた以外のご家族について、臨時収入、副収入、年金、株式配当などすべての収入を合わせた額(税や保険料などを差し引く前の額)をお答えください。

- | | | | |
|-----------------|-----------------|----------------------|------------|
| (1) 200万円未満 | (5) 500～600万円未満 | (9) 900～1,000万円未満 | (13) 分からない |
| (2) 200～300万円未満 | (6) 600～700万円未満 | (10) 1,000～1,200万円未満 | |
| (3) 300～400万円未満 | (7) 700～800万円未満 | (11) 1,200～1,500万円未満 | |
| (4) 400～500万円未満 | (8) 800～900万円未満 | (12) 1,500万円以上 | |
- *(13)は欠損値として処理

● 都市度(高2)

在籍高校の所在地より、高校生の生活空間としての4分類をおこなった。

- (1) 三大都市圏(東京都、神奈川などの全域、京都市、大阪府全域など)
- (2) 地方中枢都市圏(札幌市、広島市、福岡市など)
- (3) 地方中枢拠点都市圏(旭川市、高崎市、長野市、倉敷市など)
- (4) その他の地方都市(岩見沢市、敦賀市、出雲市など)

【出典】

都市度の分類に関しては、下記の第4章(柏木智子)を参照のこと。

溝上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編)(2015). どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ― 学事出版

● 中高一貫校(高2)

「あなたは中高一貫教育(あるいは小中高一貫教育)で学ぶ生徒ですか。」

- (1) はい (2) そうだが、この学校で学ぶのは高校からだ (3) いいえ (4) よくわからない

本研究では、(1) 中高一貫校 (0) それ以外 に再分類して分析をおこなった。

● SSH経験(高2)

「あなたはSSH(スーパーサイエンスハイスクール)のプログラム(あるいはそれに類似する学校独自のサイエンスプログラム)に参加していますか。」

- (1) 参加している(した)し、満足している(満足した)
- (2) 参加している(した)が、あまり満足していない(満足しなかった)
- (3) 参加していない／知らない

● 高校の大学進学程度(高2)

河合塾の進学資料を用いて、所属する高校を以下のいずれかに分類した。

- (3) 難関国公立大・私立大に多数進学 (2) 中堅国公立大・私立大に多数進学 (1) その他の私立大・短大に多数進学

● 地域移動(高校卒業後)

「高校を卒業されたとき、あなたはどこにお住まいでしたか。都道府県名と市名(市ではない場合は町村名)を具体的にお答えください。」

[]都道府県 []市(あるいは町村)

「現在のあなたの住所は、さきほどお尋ねした高校卒業時の住所と同じですか。もし違っていたら、都道府県名と市名(市ではない場合は町村名)を具体的にお答えください。」

(1) 同じ

(2) 違う []都道府県 []市(あるいは町村)

【出典】1995年SSM調査A票

本研究では、(1) 違う(→移動あり) (0) 同じ(→移動なし) と再分類して分析をおこなった。

● 国公立大学(高校卒業後)

「現在在籍している大学は、国立ですか、公立ですか、私立ですか。」

(1) 国立 (2) 公立 (3) 私立

本研究では、(1) 国公立 (0) 私立 と再分類して分析をおこなった。

● 大学偏差値(高校卒業後)

現在在籍している大学を

河合塾の「入試難易ランキング予想表」(<http://www.keinet.ne.jp/rank/index.html>)を参考にして

(5) 偏差値65以上

(2) 偏差値40-49

(4) 偏差値60-64

(1) 偏差値39以下

(3) 偏差値50-59

(0) 不明

に分類した。本研究では、度数の関係から(1)と(2)を合算して、(2) 偏差値49以下 として分析をおこなった。
(0) 不明 は欠損値として処理した。

● 大学の所属学部・学科(高校卒業後)

「学部・学科の種類は何ですか。もっとも近い番号を選んでください。」

(1) 人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)

(2) 社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)

(3) 理科系(理学・工学・農学など)

(4) 芸術系(美術・音楽・デザイン学など)

(5) (1)～(4)以外の文科系でもあり理科系でもある

(6) 4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)

(7) 6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)

(8) その他()

本研究では、(4)と(5)と(8)を合算して(8) その他とし、

(1) 人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)

(2) 社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)

(3) 理科系(理学・工学・農学など)

(6) 4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)

(7) 6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)

(8) その他

とカテゴリーを整理して分析をおこなった。

プロジェクト組織

- 調査企画・分析:

溝上慎一(学校法人桐蔭学園理事長 トランジションセンター所長 桐蔭横浜大学特任教授)

* 調査開始時は、京都大学高等教育研究開発推進センター 教授

- 調査実施や事務管理等:

学校法人河合塾 教育研究開発部

赤塚 和繁

石鍋 京子

伊藤 寛之

片山 まゆみ

木山 さゆり

小山 優一

高井 靖雄

山本 康二

※五十音順

「学校と社会をつなぐ調査」4時点目成果報告書

2019年(平成31年)11月

編集・発行: 溝上慎一・学校法人河合塾

〒225-8502 横浜市青葉区鉄町1614 学校法人桐蔭学園

TEL 045-971-1411 (代表) E-mail mizokami@toin.ac.jp

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/>

〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-49-7 池袋パークビル6階

学校法人河合塾 教育研究開発部

TEL 03-6811-5531 E-mail kkt@kawai-juku.ac.jp

<http://www.kawai-juku.ac.jp/research/sch/>

*無断転載を禁じます。